志木市遺跡調査会調査報告第１集

西原大塚遺跡第３地点
中野遺跡第２地点
発掘調査報告書

1985
志木市遺跡調査会

はじめに

志木市遺跡調査会
会　長　金子庄三

文化財は私達の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。様々な困難を克服し生きていた先人の業績を知ることは、新たな文化を創造してゆく上での絶好のみちしるべとなるはずです。それ故に、この文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私達に与えられた使命であるといってよいでしょう。

志木市は武蔵野台地の東端に位置し、荒川・柳瀬川に面した台地縁辺部には埋蔵文化財の包蔵地が分布しています。

東京付近に所在する当市は、近年都市化の現象が著しく、宅地造成が急速に進むなかで、土地に直接かかわりあう埋蔵文化財を保護・保存してゆくことは、重要な課題となってきております。

ここに報告する2件の発掘調査は、住宅建設に伴う記録保存の為行ったもので、その経緯につきましては問題となる点もありましたが、多大な成果を上げ報告書としてまとめることができました。本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、郷土の歴史を研究するための資料として役立つことができれば幸いに思います。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでには、埼玉県文化財保護課、志木市文化財保護委員をはじめ多くの皆様のご指導とご協力を賜わりました。ここに深く感謝申し上げます。

例　　言

1．本書は、埼玉県志木市幸町３丁目に所在する西原大塚遺跡第３地点（58委保第５の1285号）及び柏町１丁目に所在する中野遺跡第２地点（59委保第５の７８８号）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により志木市遺跡調査会がこれを受け実施した。

3．本書の作成・編集は、志木市遺跡調査会が行い、執筆は、第１章　佐々木保俊、第２章　佐々木・尾形則敏が行った。また、挿図版の作成は執筆者があたった。

4．本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○縮尺は、各挿図版中に指示した。

○水糸レベルは、海抜標高を示す。

○掘り込み内の数字は、確認面ないし床面からの深さを示し、単位はcmである。

5．発掘調査及び出土品整理、報告書作成にあたっては、以下の諸機関・諸氏に御援助・御教授を賜わった。謝意を表する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局文化財保護課・志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市立志木第三小学校

会田　明・麻生　優・荒井幹夫・飯田充晴・小出輝雄・肥沼正和・笹森健一・塩野　博

斯波　治・高橋　敦・中島岐視生・中山清隆・並木　隆・広野　淳・松本富雄・宮崎朝雄

6．調査組織

役　員　会　長　金子庄三（志木市教育委員会教育長）

副会長　市之瀬昭太郎（志木市教育委員会事務局長）（～昭和59年９月）

斉藤昭吉（志木市教育委員会事務局次長）（昭和59年10月～）

理　事　萩元家義（志木市文化財保護委員長）

神山健吉（志木市文化財保護委員）

根岸正文（　　〃　　）

宮野和明（　　〃　　）

井上国夫（　　〃　　）

理事兼事務局長　大熊謙次（志木市教育委員会社会教育課長）（～昭和59年３月）

内田喜久男（　　〃　　）（～昭和60年９月）

白砂正明（　　〃　　）（昭和60年10月～）

監　事　田中義二（志木市教育委員会社会教育指導員）

服部一次（志木市立郷土資料館長）

事務局　清水孝平（社会教育課長補佐）

鈴木重光（社会教育課主査）

岩崎香代子（社会教育課）

調査員　佐々木保俊

7．調査地点

西原大塚遺跡第3地点　志木市幸町3丁目3150－5他　委託者　個　人　面積　439m²

中野遺跡第2地点　志木市柏町1丁目1496－15他　委託者　個　人　面積　578.91m²

8．調査参加者

西原大塚遺跡第3地点

調査協力員　佐藤小夜子・高田輝子・山科美智

中野遺跡第2地点

調査補助員　尾形則敏

調査協力員　池田久枝・加納正子・笠原博子・剱持ひろみ・田川和子
高田輝子・辺見まさ代・宮田正枝・屋代時子・山科美智

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次

図版目次

挿図目次

第1章　西原大塚遺跡第3地点の調査……1

第1節　調査の経緯……1

(1) 調査に至る経過……1

(2) 立地と環境……2

(3) 発掘調査の経過……2

第2節　出土した遺構と遺物……4

(1) 住居址……4

(2) 土　坑……11

(3) 包含層出土の遺物……13

第3節　まとめ……14

第2章　中野遺跡第2地点の調査……16

第1節　調査の経緯……16

(1) 調査に至る経過……16

(2) 立地と環境……17

(3) 発掘調査の経過……17

第2節　出土した遺構と遺物……18

(1) 住居址……18

(2) 溝遺構……28

(3) 包含層出土の遺物……28

第3節　まとめ……30

図 版 目 次

図版1　西原大塚遺跡第3地点（上）破壊状況　（下）発掘風景
図版2　〃　（上）1・6号住居址　（下）2号住居址
図版3　〃　（上）3号住居址　（下）4号住居址
図版4　〃　（上）5号住居址　（下）7号住居址
図版5　〃　（上）1号土坑　（下）2号土坑
図版6　〃　（上）1号住居址出土土器・2号住居址出土土器　（中）3号住居址出土土器　（下）4号住居址出土土器
図版7　〃　5号住居址出土土器
図版8　〃　（上）6号住居址出土土器・7号住居址出土土器　（中）1号土坑出土土器・2号土坑出土土器　（下）包含層出土土器
図版9　中野遺跡第2地点（上）遺跡近景　（下）発掘風景
図版10　〃　（上）1号住居址　（下）1号住居址出土土器
図版11　〃　（上）2号住居址・1号溝　（下）2号住居址出土土器
図版12　〃　（上）3号住居址　（下）3号住居址カマド
図版13　〃　3号住居址出土土器
図版14　〃　（上）4号住居址　（下）4号住居址出土土器
図版15　〃　（上）5号住居址　（下）包含層出土土器

挿 図 目 次

第1図　周辺の遺跡（1／40000）……1
第2図　周辺の地形と発掘区（1／5000）……2
第3図　遺構分布図（1／300）……3
第4図　1・6号住居址（1／60）……5
第5図　1号住居址出土土器（1／3）……5
第6図　2・7号住居址（1／60）……5
第7図　2号住居址出土土器（1／4）……5
第8図　3号住居址（1／60）……6
第9図　3号住居址出土土器（1／3）……6
第10図　4号住居址（1／60）……7
第11図　4号住居址出土土器（1／3）……7

第12図　5号住居址（1／60）……8
第13図　5号住居址出土土器1（1／4）……9
第14図　5号住居址出土土器2（1／3）……10
第15図　6・7号住居址出土土器（1／3）……11
第16図　土坑（1／40）……12
第17図　土坑出土土器（1／3）……12
第18図　含包層出土土器（1／3）……13
第19図　周辺の地形と発掘区（1／5000）……16
第20図　遺構分布図（1／300）……17
第21図　1号住居址（1／60）……18
第22図　1号住居址出土土器（1／4）……19
第23図　2号住居址・1号溝（1／60）……20
第24図　1号住居址出土土器（1／4）……21
第25図　3号住居址（1／60）……23
第26図　3号住居址カマド（1／30）……25
第27図　3号住居址出土土器（1／4）……26
第28図　4号住居址（1／60）及びカマド（1／30）……27
第29図　4号住居址出土土器（1／4）……28
第30図　4号住居址（1／60）……28
第31図　含包層出土土器（1／3）……29

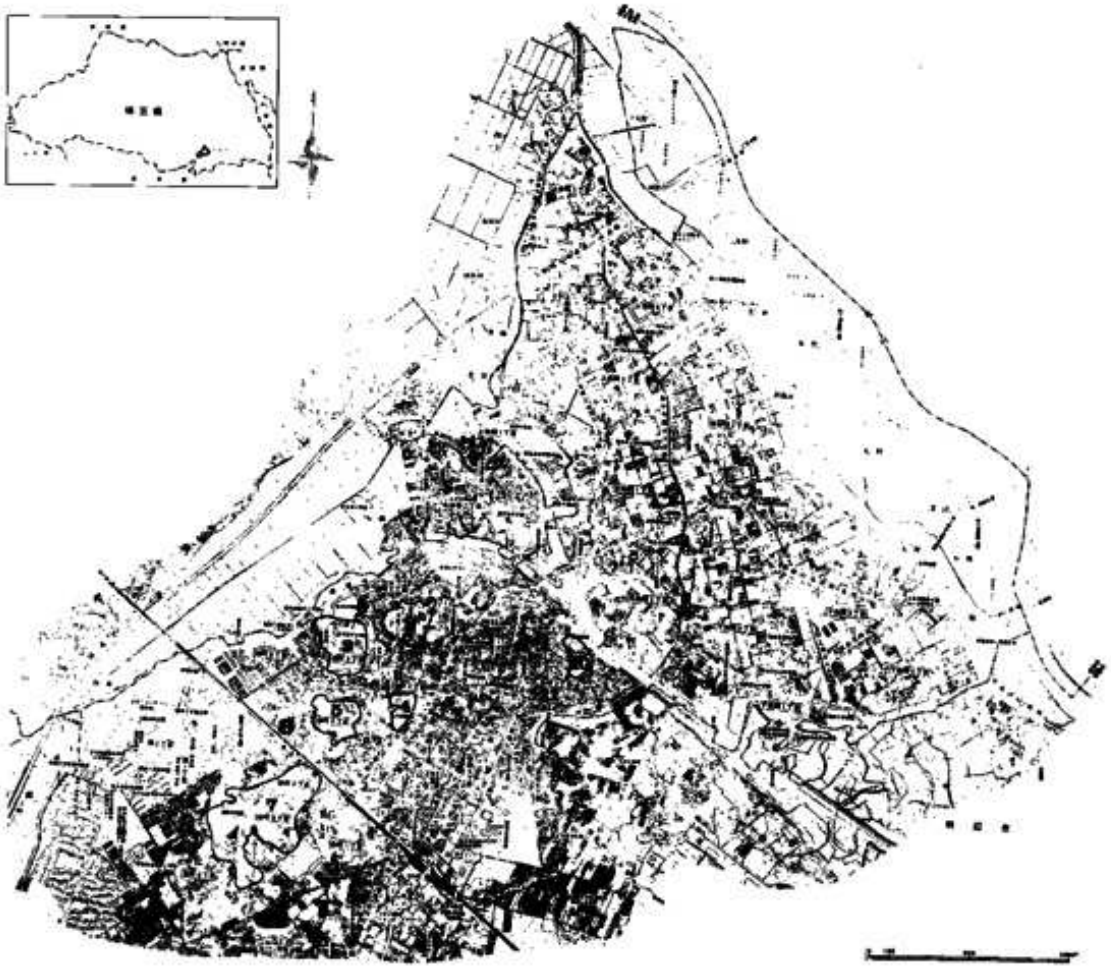
第1章　西原大塚遺跡第3地点の調査

第1節　調査の経緯

(1) 調査に至る経過

本市は埼玉県の東南部に位置し、首都近郊25Km圏内にあって都市化の現象は著しい。その中で、武蔵野台地の東縁部にあたる市内には、12ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。中でも、西原大塚遺跡は、縄文時代から各時期にわたる遺構が集中しており、市内最大の包蔵地である。この包蔵地は、区画整理事業地域内にあり、畑がまだ多く残されているものの、将来、住宅地として開発が進み、現状のままで長期的に維持するのは難しく、記録保存を余儀なくされるところである。

今回の発掘調査は、この西原大塚遺跡内にある幸町3丁目3150－5及び3161地内の住宅建設に伴うものであるが、開発事業者との事前協議の遅延により、工事進行途中からの調査開始になってしまった。このことから、開発事業者に協力を求め、未破壊部分の現状を維持するとともに、工事



第1図　周辺の遺跡（1／40000）

の進行に合わせて発掘調査を実施することになり、工事が一段落する時点で、志木市教育委員会が志木市遺跡調査会（以下「遺跡調査会」）に依頼することになった。遺跡調査会では、これを受けて委託契約を締結し、発掘調査を開始した。

(2) 立地と環境

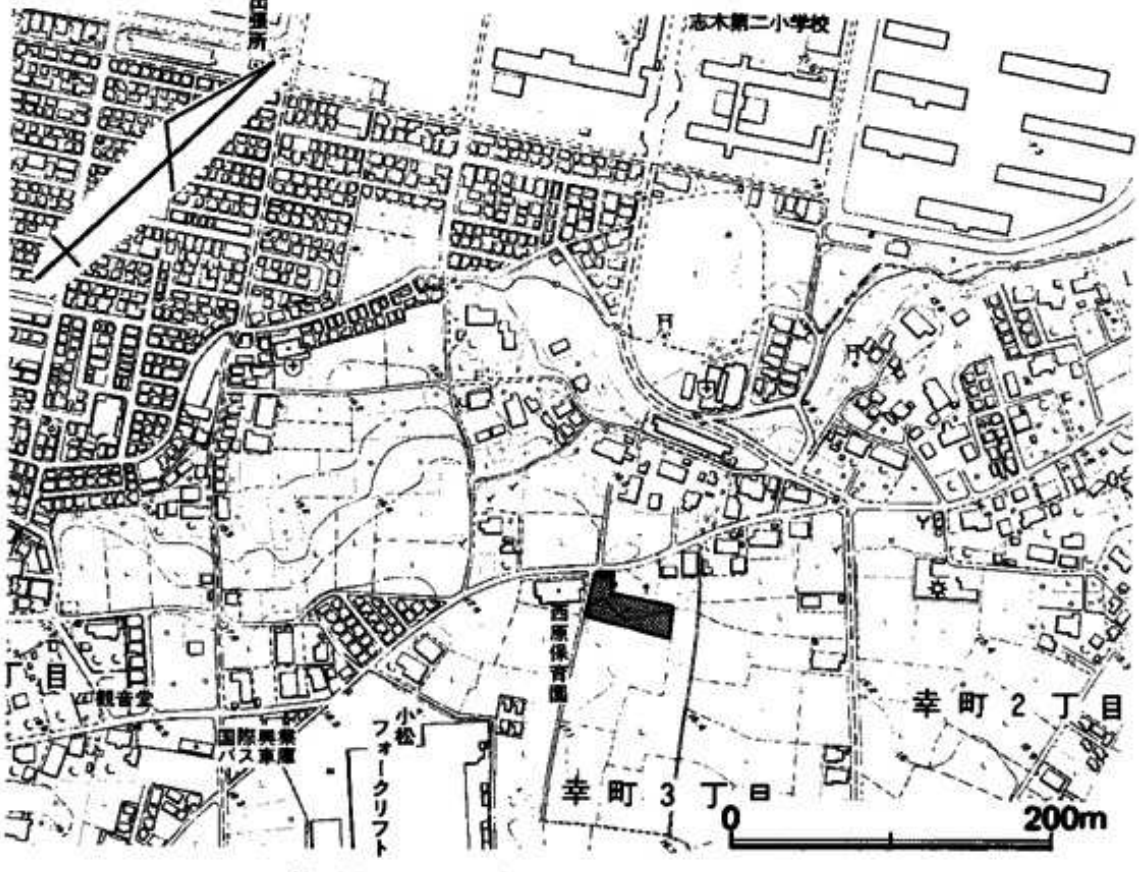
志木市は、埼玉県の東南部に位置する。地形は、東北部には荒川によって形成された沖積地が広がり、西南部は武蔵野台地、西部は柳瀬川によって開析された沖積地となる。市内の遺跡は、主に荒川・柳瀬川を臨む台地縁辺部にあるが、荒川沖積地の自然堤防上に遺跡のある可能性ももたれてきている。

西原大塚遺跡は、市の西端、旧多摩川の名残川といわれる柳瀬川の開析した低地を臨む台地上にあり、標高17m前後、低地との比高差10m前後を測る。遺跡の周辺は、大部分が畑地であるが、近年宅地化が進み、徐々にその環境を変えつつある。

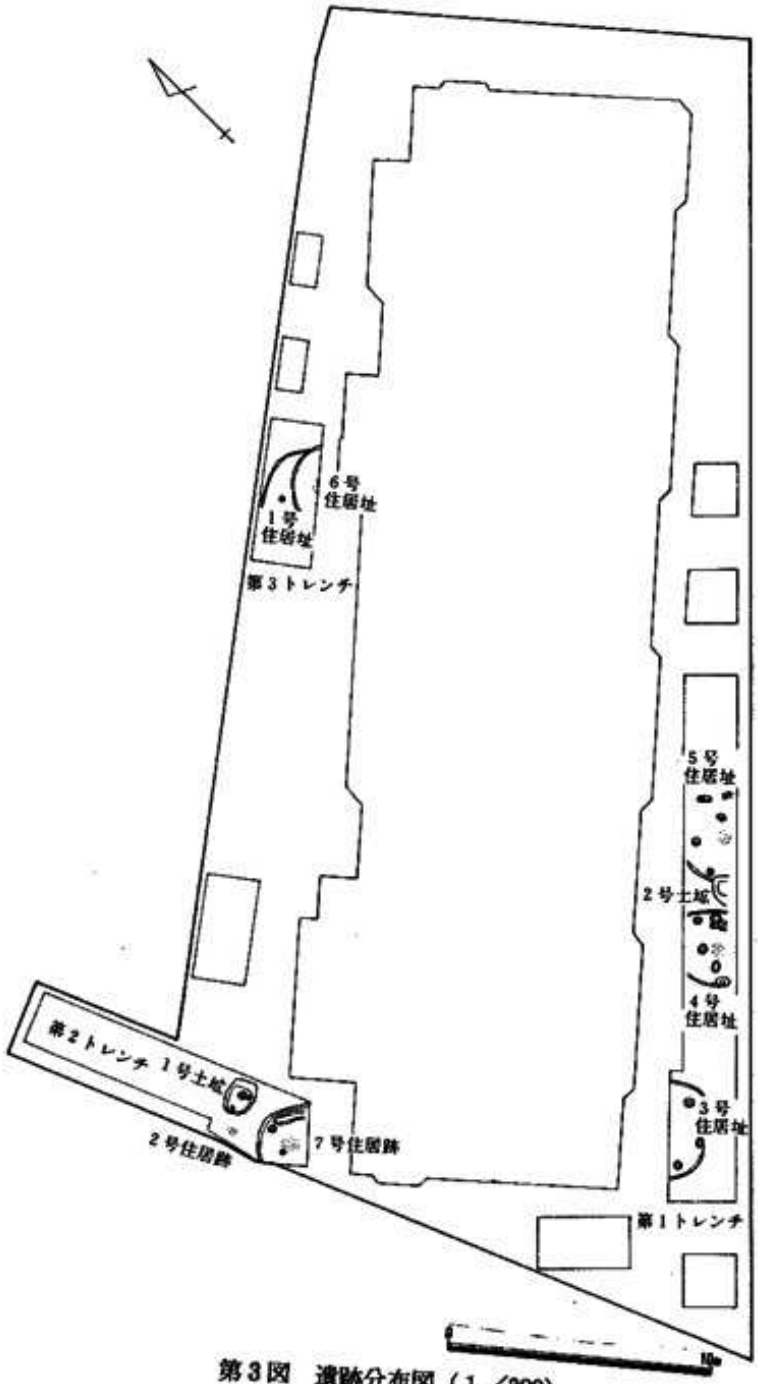
本遺跡は、過去２度の発掘調査が行われており、縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡であることが判明している（谷井・宮野他　1975、小久保　1981）。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は、８月23日から開始した。前述したように、発掘区域内には建物が建築中であったた



第２図　周辺の地形と発掘地点（１／5000）



第3図　遺跡分布図（1／300）

め、調査は発掘可能な部分に任意にグリッド・トレンチを設定して行わざるを得なかった。また、発掘区内は盛り土があったり、重機が入って土が固められていた部分もあったため、遺構確認作業は状況に応じてバックホーも使用して行った。その結果、発掘区南側の第1トレンチ内で3ヶ所の落ち込みを、西側の第2トレンチ内で2ヶ所の落ち込みを、第3トレンチ内で1ヶ所の落ち込みを検出した。

遺構の精査は、建築工事の進展との関係で、第3トレンチから開始した。当初1ヶ所の落ち込みと考えられていたものは、2軒の住居址の重複と判明、1軒は縄文時代中期、他は弥生時代末葉～古墳時代初頭のものであったが、共に部分的な調査にとどまった。8月29日からは、第1トレンチ・第2トレンチの遺構精査にかかった。第2トレンチの2ヶ所の落ち込みは、縄文時代中期の土坑と弥生時代末葉～古墳時代初頭の住居址であることがわかったが、他にローム面を床面とする堀り込みの浅い住居址が1軒検出された。これは縄文時代中期のものであった。第1トレンチの3ヶ所の落ち込みは、いずれも縄文時代中期の住居址であることが判明した。また、土坑も1基検出された。

以上の遺構の精査後、実測・写真撮影などの記録の作成を行い、9月7日には埋め戻しを完了し発掘調査を終えた。

第2節　出土した遺構と遺物

(1) 住居址

1号住居址（第4図）

第3トレンチにおいて発見された。住居南側の大半は6号住居址に切られている。規模は判明した部分で360cm前後を測る。壁は住居西側が一部攪乱の為破壊されているが、遺存している部分では高さ20cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は概ね良好で、部分的に硬化している面があった。炉は検出されなかったが、6号住居址に破壊されたものと思われる。柱穴は1本検出された。住居址の覆土は、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土である。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半と考えられる。

1号住居址出土土器（第5図）

1～3は縄文を地文とし、平行沈線間を磨り消した懸垂文が施された土器である。縄文は1が単節LR、2は複節LRL、3は無節Rである。

4は無節Rの斜縄文を地文とし、沈線により曲線的な文様が描かれる。

5・6は縄文が施された土器で、5は単節RL、6は無節Rである。

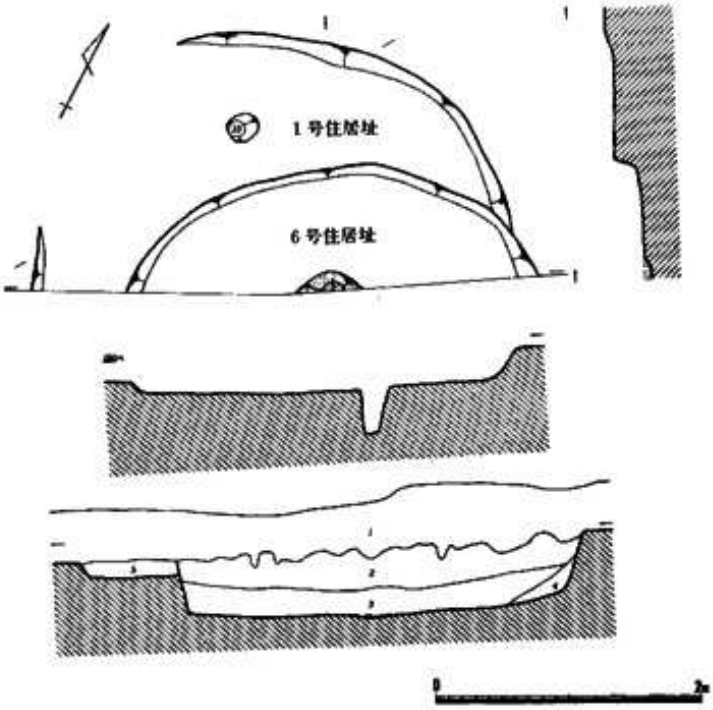
2号住居址（第6図）

第2トレンチにおいて発見された。住居南側は7号住居址に切られている。耕作による攪乱が著しいのと、ローム面をほぼ床面としているため、壁を確認することはできなかった。また、柱穴も発見できず、炉の検出のみにとどまった。炉は40×30cmの楕円形を呈し、深さ10cm前後の掘り込み

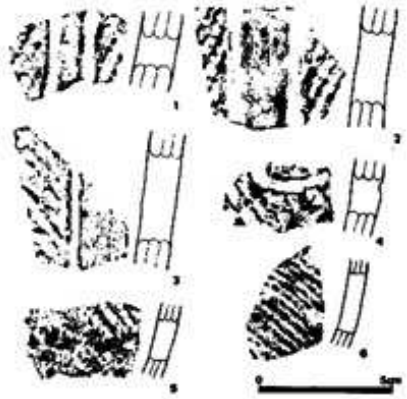
をもち、胴部下半を断ち切った深鉢形土器を斜位に埋設した埋甕炉であった。本住居址の時期は、炉体土器から加曽利ＥⅡ期と考えられる。

２号住居址出土器（第７図）

炉に埋設されていた土器である。胴部中位で若干屈曲し、単純に開く深鉢形土器である。条線を

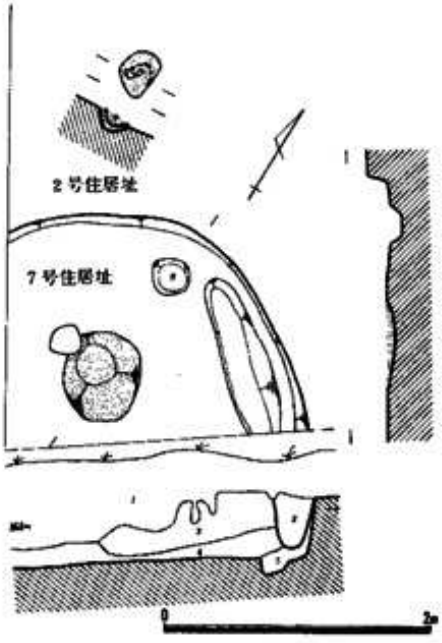


第４図　１・６号住居址（１／60）

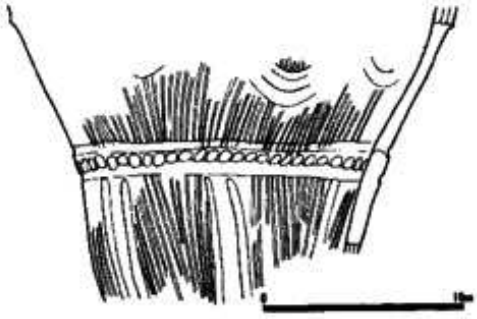


第５図　１号住居址出土土器（１／３）

1．耕作土
2．暗茶褐色土（ローム粒子を多量に含む）
3．暗褐色土（ローム粒子焼土粒子を含む）
4．茶褐色土（ローム粒子を多量に含む）
5．黒褐色土（ローム粒子を少量含む）



第６図　２・７号住居址（１／60）



第７図　２号住居址出土土器（１／４）

1．耕作土
2．黒褐色土（後世のピット）
3．暗茶褐色土（ローム粒子を多量に含む）
4．暗褐色土（炭化物粒子・焼土粒子を含む）
5．暗茶褐色土（ローム粒子を多量に含む）

地文とし、胴部中位の屈曲部には平行沈線が巡り上下を区画する。沈線間には円形の刺突文が押捺される。胴部上半には平行沈線による弧線文が、下半には平行沈線の懸垂文が7単位施される。平行沈線及び円形の刺突文は、同一の丸棒状の施文具によるものと思われる。

3号住居址（第8図）

第1トレンチで発見された。住居北側の大半を破壊されている。また、過去に土の入れ替えが行われており、その影響がローム層にまで及んでいて遺存状態はよくなかった。規模は判明した部分で380cm前後を測った。壁は南壁の一部を破壊されているが、高さ10cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は軟弱であった。炉は検出されなかったが、破壊された部分にあったものと思われる。柱穴は3本検出されたが、東・西壁際の2本が深度もあり、主柱穴の一部と思われる。住居址の覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半と考えられる。

3号住居址出土土器（第9図）

1は隆帯に沿って連続爪形文が施され、横位に波状沈線が巡る。

2は縦・横に隆帯が貼り付けられた土器で、横位の隆帯上は棒状の施文具により押捺される。

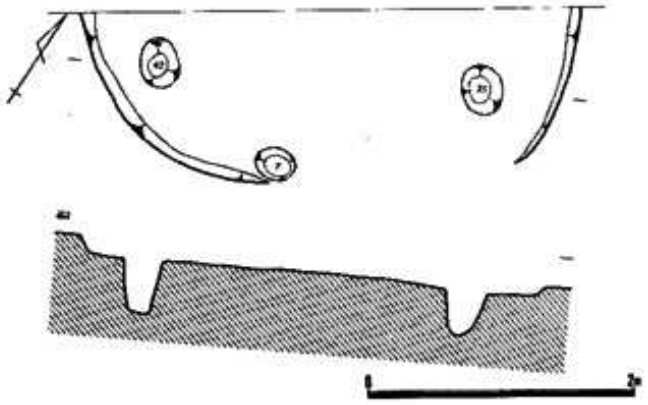
3はキャリパー形を呈すると思われる土器の口縁部破片である。隆帯による区画内は単節LRの斜縄文が施されている。

4は口唇部下に隆帯が貼り付けられた土器である。隆帯下は縄文が施されているようであるが、器面が荒れて不鮮明である。

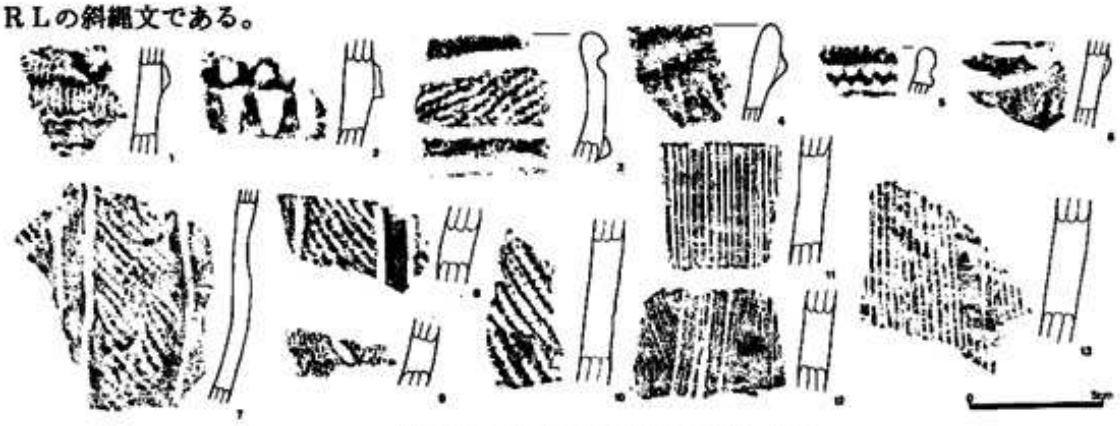
5は口唇部下に丸棒状施文具による刺突文が2段施される。

6は隆帯が貼り付けられた土器である。

7・8は沈線間を磨り消した平行沈線の懸垂文が施された土器で、地文は共に単節RLの斜縄文である。



第8図　3号住居址（1／60）



第9図　3号住居址出土土器（1／3）

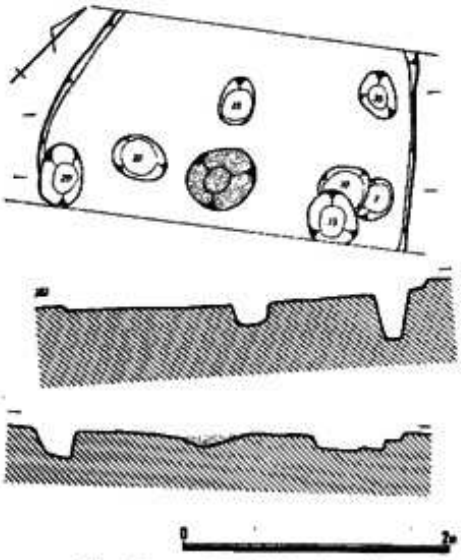
9はR撚りの撚糸文を地文とした土器で、沈線による文様が描かれる。

10は単節ＲＬの斜縄文が施された土器である。

11～13は条線が施された土器であるが、12には平行沈線の懸垂文がみられる。

4号住居址（第10図）

第1トレンチにおいて発見された。住居北側は破壊され、南半は発掘区外にある。規模は判明した部分で280cm前後を測った。壁高は5cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は軟弱であった。炉は径50cm前後を測るほぼ円形を呈した地床炉で、深さ10cm前後を測る。柱穴は7本検出されたが、北壁際の1本を除いて浅い。住居址の覆土は、上層がローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多量に含む暗茶褐色土であった。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半と考えらる。



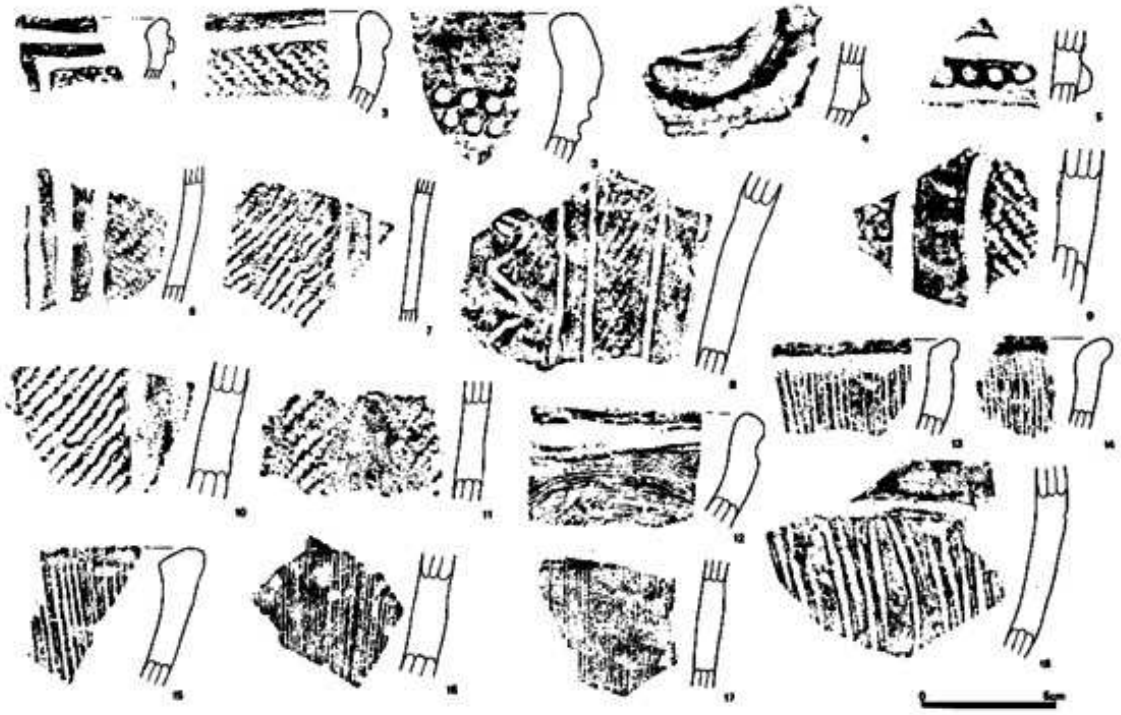
第10図　4号住居址（1／60）

4号住居址出土土器（第11図）

1は隆帯による区画をもつ土器で、区画内には縄文が施されている。

2はキャリパー形を呈すると思われる土器の口縁部破片で、複節ＲＬＲの斜縄文が施される。

3は内湾した口縁部をもつ土器で、口唇部下に広い



第11図　4号住居址出土土器（1／3）

無文帯をもち、丸棒状施文具による円形の刺突文が２段施される。

４は弧状に隆帯が貼り付けられた土器である。

５は横位に隆帯が貼り付けられた土器で、隆帯上には丸棒状施文具による円形の刺突文が施される。

６～９は沈線間が磨り消された平行沈線の懸垂文が施された土器で、８には蛇行する沈線による懸垂文も加えられている。地文の縄文は６～８が単節ＬＲ、９はＲＬである。

10・11は縦位に無文帯をもつ土器であるが、その無文帯は10が磨り消しであるのに対して、11は縦回転の縄文帯の間隔をあけることによって形成されている。10は単節ＬＲ、11は複節ＲＬＲの縄文が施される。

12～17は条線が施された土器である。12は口唇部下に１条の沈線が巡り、弧状に条線が施される。13～15は口唇部が内削ぎ状となる土器で、13・14は口唇部が外側へ屈曲する。

18は横位に１条の沈線が巡り、それ以下は縦位の沈線が集合して施される。

５号住居址（第12図）

第１トレンチにおいて発見された。住居北側を破壊され、南半は発掘区外にある。また、２号土坑と重複するが、新旧関係は層位的には確認できなかった。規模は判明した部分で320cmを測る。壁は東壁の一部を破壊されているが、高さ５cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は軟弱であった。炉は埋甕炉で、径55cm、深さ20cmの掘り込みをもつ。炉体土器は胴部下半を断ち切った深鉢形土器を使用している。柱穴は５本検出されたが、壁際のものが深度がある。住居址の覆土は、ローム粒子を多量に含む暗茶褐色土を基調とする。遺物の出土は多くないが、床面上から小形の土器が出土した。本住居址の時期は炉体土器から加曽利ＥⅡ期と考えられる。

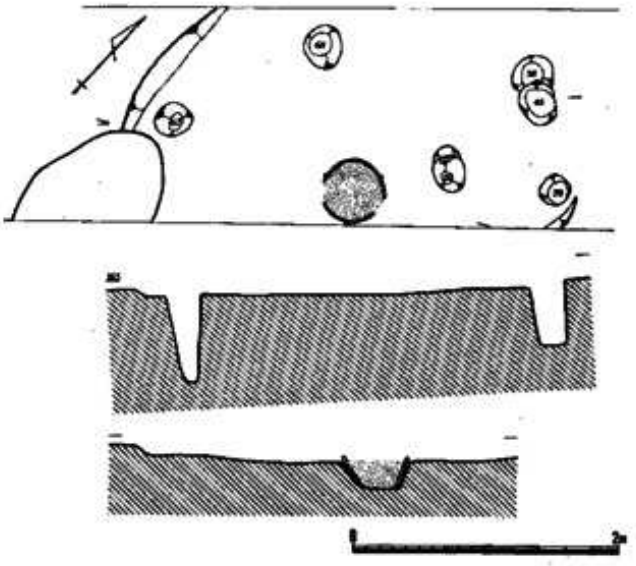
５号住居址出土土器（第13・14図）

第13図は炉体土器として使用されていた土器である。器形は退化したキャリパー形を呈する。口縁部文様帯は隆帯による対向する１対の三角形の区画文が３単位施され、それぞれの連結部には、隆帯による渦巻文状の楕円形区画文が配される。胴部には沈線間が磨り消された平行沈線の懸垂文が13単位施される。地文は複節ＬＲＬの斜縄文である。

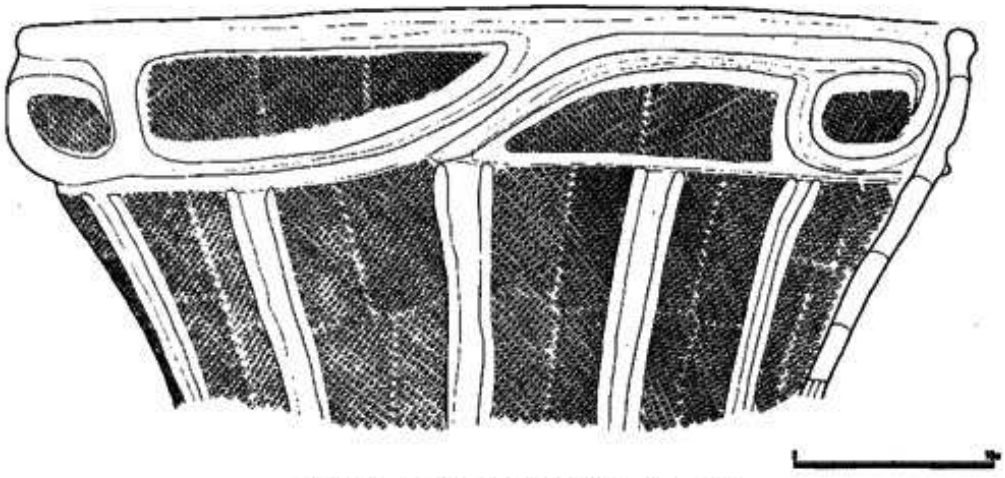
第14図１は結節沈線文により楕円形の区画文が施された土器である。

２は沈線により文様が描かれた土器で、刻みの附加された平行沈線や渦巻文がみられる。

３はキャリパー形を呈すると思われる



第12図　５号住居址（１／60）



第13図　5号住居址出土土器1（1／4）

土器の口縁部破片である。

4は縄文を地文とする土器で、平行沈線による逆「U」字状の懸垂文が施され、沈線間は磨り消される。

5は隆帯の貼付文をもち、それ以下は単節の斜縄文が施され、沈線が垂下する。

6～9は単節の斜縄文を地文とする土器で、平行沈線による懸垂文が施され、沈線間は磨り消される。6には沈線による蛇行する懸垂文もみられる。

10は撚糸文を地文とし、平行沈線が垂下する。

11・12は縦回転の縄文が施された土器で、11は単節ＬＲ、12は複節ＲＬＲである。

13・14は集合する沈線が施された土器である。

15～19・21～28は条線を地文とする土器で、15・22～25は平行沈線が垂下され、沈線間は磨り消される。16は口縁部が内湾する土器で、口唇部下は広い無文帯となり、それ以下は条線が施される。17は「く」字状に屈曲する土器で、屈曲部には隆帯が巡る。18・19は隆帯が巡り、そこから平行沈線が垂下される。21は平行沈線により曲線的な文様が描かれる。

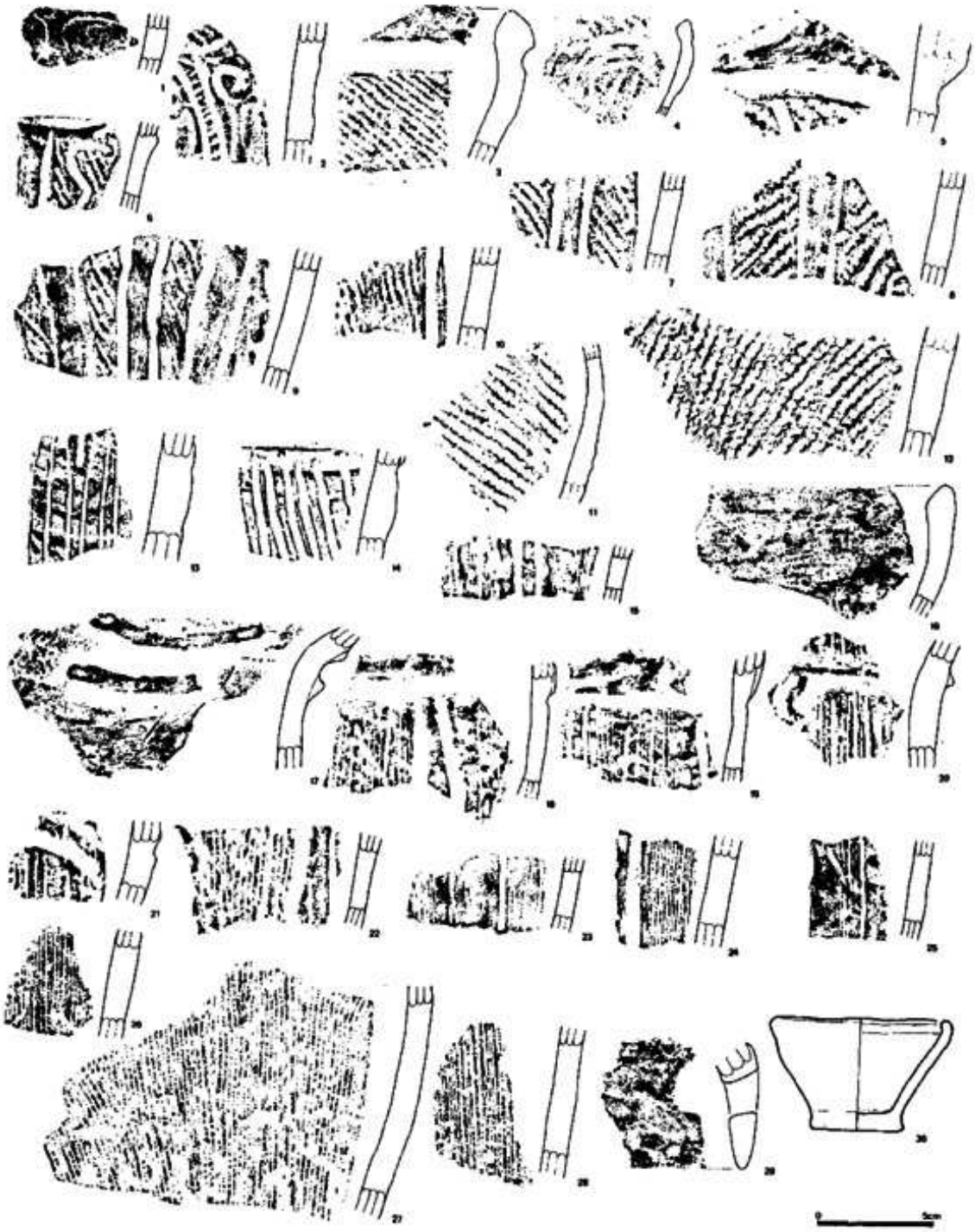
20は横位に隆帯が貼り付けられ、その後集合する沈線が施された土器で、蛇行する隆帯が垂下する。

29は器台形土器と思われる土器で、円孔が穿たれている。

30は床面上出土の鉢状を呈した小形土器である。

6号住居址（第4図）

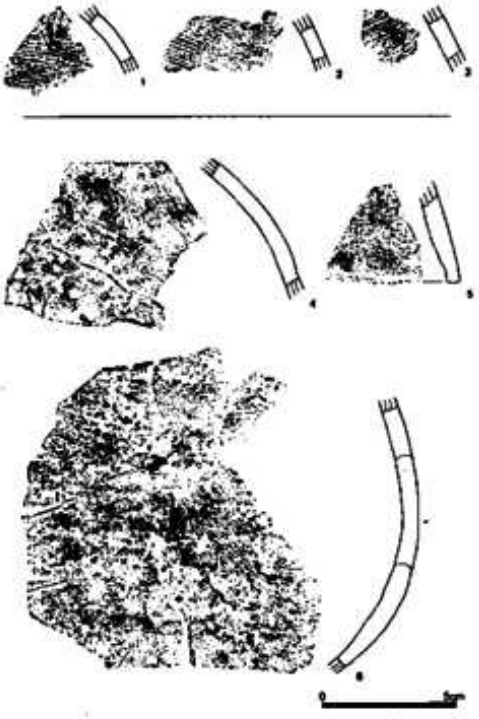
第3トレンチにおいて発見された。住居南側の大半を破壊されている。また、1号住居址を切る。規模は判明した部分で310cm前後を測る。壁高は50cm前後を測り、急斜に立ち上がる。床面はよく踏み固められ、叩き床状を呈する。炉はほぼ1／2の検出にとどまり、径50cm、深さ10cm前後の地床炉である。柱穴は検出されなかった。住居址の覆土は、上層ではローム粒子を多量に含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土であった。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から弥生時代末葉～古墳時代初頭と考えられる。



第14図　5号住居址出土土器2（1／3）

6号住居址出土土器（第15図1～3）

いずれも甕形土器である。外面にはハケ目を残す。



第15図　6・7号住居址出土土器（1／3）

7号住居址（第6図）

第2トレンチにおいて発見された。住居西半は発掘区外にあり、また、南半は破壊されていて、ほぼ1／4程度の調査に終った。壁高は50cm前後を測り、急斜に立ち上がる。壁溝は東壁下に認められ、幅35cm、深さ10cm前後を測る。床面はよく踏み固められ、叩き床状を呈する。炉は70×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。柱穴は2本検出されたが、炉を切る1本は後世のものである。住居址の覆土は、上層ではローム粒子を多量に含む暗茶褐色土、下層は暗褐色土であるが、いずれも炭化物粒子・焼土粒子を多量に含み、焼失家屋の可能性がある。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から弥生時代末葉～古墳時代初頭と考えられる。

7号住居址出土土器（第15図4～6）

4は壺形土器。内面は丁寧に磨かれ、光沢を有する。

5・6は甕形土器。5は台部で、外面に縦位のハケ目を残す。6は胴部下半にあたる破片と思われ、外面には煤が付着する。

(2) 土坑

1号土坑（第16図）

第2トレンチにおいて発見された。130×110cmの大略長方形を呈し、深さ30cm前後を測る。壁は東壁がゆるやかであるが、他は急斜に立ち上がる。坑底は平坦で、3本のピットが検出された。覆土は炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子を多量に含む暗茶褐色土で、遺物は比較的多く出土した。本土坑の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半と考えられる。

1号土坑出土土器（第17図1～12）

1～3は撚糸文を地文とする土器で、1は口唇に沿って3条の沈線が巡る。2は「く」字状に屈曲し、屈曲部には2条の沈線が巡り、その上下に沈線による曲線的な文様が描かれる。撚糸文はいずれもLである。

4は縄文を地文とする土器で、平行沈線の懸垂文間には、沈線による長楕円形になると思われる文様が充填される。

5・7・8は条線を地文とする土器で、7は口唇部下に無文帯をもち、平行沈線が垂下される。8は3条の沈線が巡るらしい。

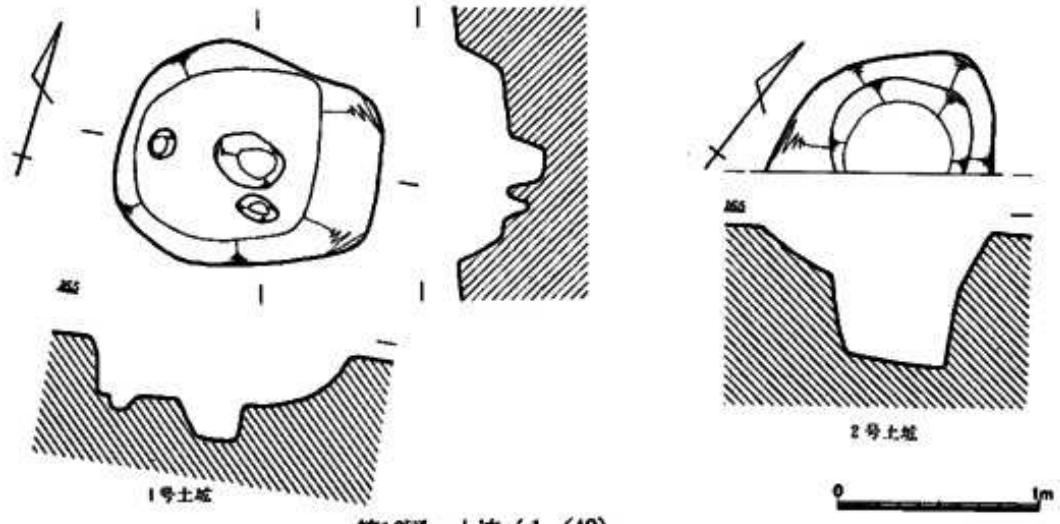
6は無文の口頸部破片で、口唇部は「く」字状に内屈する。

9・10は集合する太沈線が施された土器で、9は蛇行する隆帯の懸垂文が貼り付けられる。

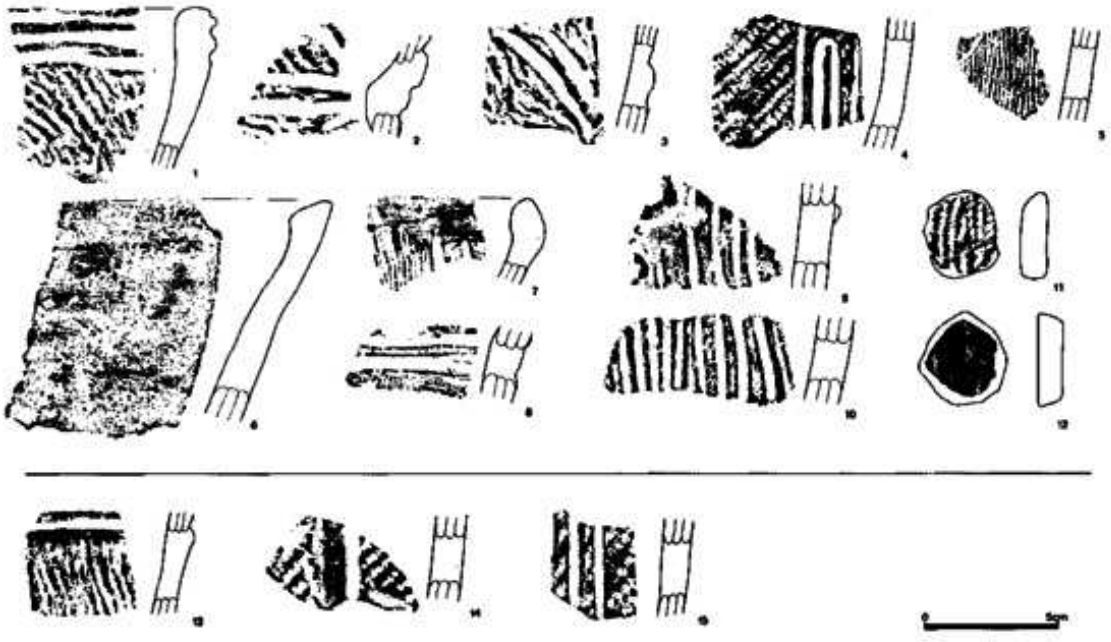
11・12は土製円盤と思われる土器である。

2号土坑（第16図）

第1トレンチにおいて発見された。南半は発掘区外にあり、5号住居址と切りあう。規模は判明した部分で径110cm、深さ70cmを測る。壁は薬研状に立ち上がる。坑底は平坦である。覆土はローム粒子を多量に含む暗茶褐色土で、炭化物粒子・焼土粒子を含む。遺物は少量の土器片の他、硅岩製の砕片2点、小礫2点が出土した。本土坑の時期は、出土した土器から縄文時代中期後半と考え



第16図　土坑（1／40）



第17図　土坑出土土器（1／3）

えられる。

2号土坑出土土器（第17図13～15）

13はLの撚糸文を地文とし、沈線が横位に巡り、そこから沈線が垂下される。

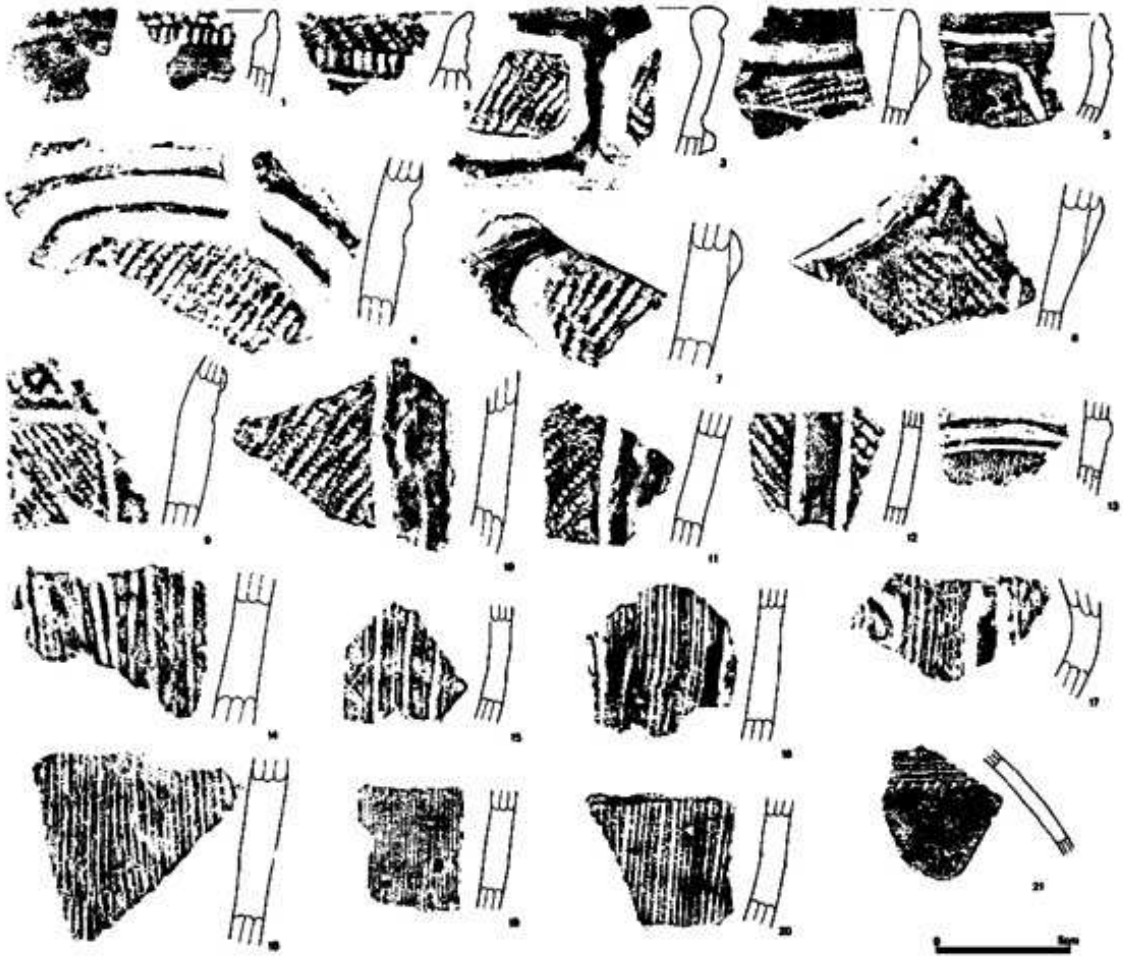
14・15は縄文を地文とする土器で、14は垂下する平行沈線間は磨り消される。15は3条の沈線が垂下される。

(3) 包含層出土の遺物

包含層出土土器（第18図）

縄文時代中期中葉の土器（1・2）

1は口縁部内面に文様をもつ上器である。口唇上には丸棒状の施文具の押捺による刻みが施され、口唇部下には、同一の施文具により押し引きした結節沈線文が巡る。それ以下は、ヘラ状施文具の押し引きによる角押文が施される。2は口唇部下に竹管の外側を押し引きした結節沈線文が巡る。



第18図　包含層出土土器（1／3）

縄文時代中期後半の土器（3～20）

3はキャリパー形を呈する土器の口縁部破片で、隆帯による楕円形の区画文が施される。区画内は単節の斜縄文が施されているが、一部で羽状になっている。

4は口縁部が波状を呈する可能性がある。口唇部下には隆帯が巡り、それ以下には横位施文の単節の縄文と沈線がみられる。

5は口唇部下に1条の沈線が巡り、逆「U」字状になると思われる懸垂文が施される。

6・7は隆帯による区画文をもつ土器で、地文は6が複節LRL、7が単節LRの斜縄文である。

8は波状に隆帯が貼り付けられた土器で、単節RLの斜縄文の上に条線が施される。隆帯からは沈線が垂下されているらしい。

9はボタン状の貼付文上に棒状施文具の刺突が3ヶ所みられる。沈線による区画内には単節の斜縄文が施されている。

10～12は平行沈線の懸垂文が施された土器で、沈線間は磨り消されている。地文はいずれも単節の斜縄文である。

13は半截竹管による平行沈線が巡る土器で、Lの撚糸文が施されている。

14・15は沈線が集合して施される。

16～20は条線を地文にもつ土器で、16は平行沈線による懸垂文が施され、沈線間は磨り消される。17は隆帯と蛇行する沈線の懸垂文が施される。

弥生時代後期の土器（21）

壺形土器の肩部と思われる。横走する櫛描文の下端に刺突文が加えられている。

第3節　ま　と　め

前述したように今回の発掘対象地は、調査以前にその大半が造成工事により破壊されていた。このような事態に至ったことについては、行政側の対応の遅れがあったことにも原因があり、今後、埋蔵文化財の保護に対して、より一層の強化を図ることが必要である。

さて、今回の発掘調査によって検出された遺構は、住居址7軒、土坑2基であった。これらの大部分は、破壊されたり、一部発掘区域外にあったりして、完掘できた1号土坑を除いて、すべて部分的な調査に終った。

縄文時代の遺構は、5軒の住居址（1～5号住居址）と2基の土坑（1・2号土坑）があった。2・5号住居址は炉の施設として埋設土器をもっており、これから時期を加曽利EⅡ期と比定することができた。他の住居址・土坑については出土した遺物が少なく詳細な点は不明であるが、中期後半、加曽利EⅡ期以降と考えて大過ないものと思われる。

6・7号住居址は、弥生時代末葉～古墳時代初頭の時期のものと思われるが、いずれも出土遺物が非常に少なく、はっきりと判断を下すことができなかった。

西原大塚遺跡は、前述したように過去2回の調査が行われていて、縄文時代では勝坂期～加曽利

EⅣ期、弥生時代弥生町期、古墳時代五領期の遺構が検出されており、大規模な集落跡が予想される。しかし、今回の調査を含めても、本遺跡のごく一部を発掘したにすぎず、遺跡の広がり・各時期の遺構の分布状況など不明な点が大部分である。これらの解明については、今後の発掘調査を待つ必要があるだろう。

第２章　中野遺跡第２地点の調査

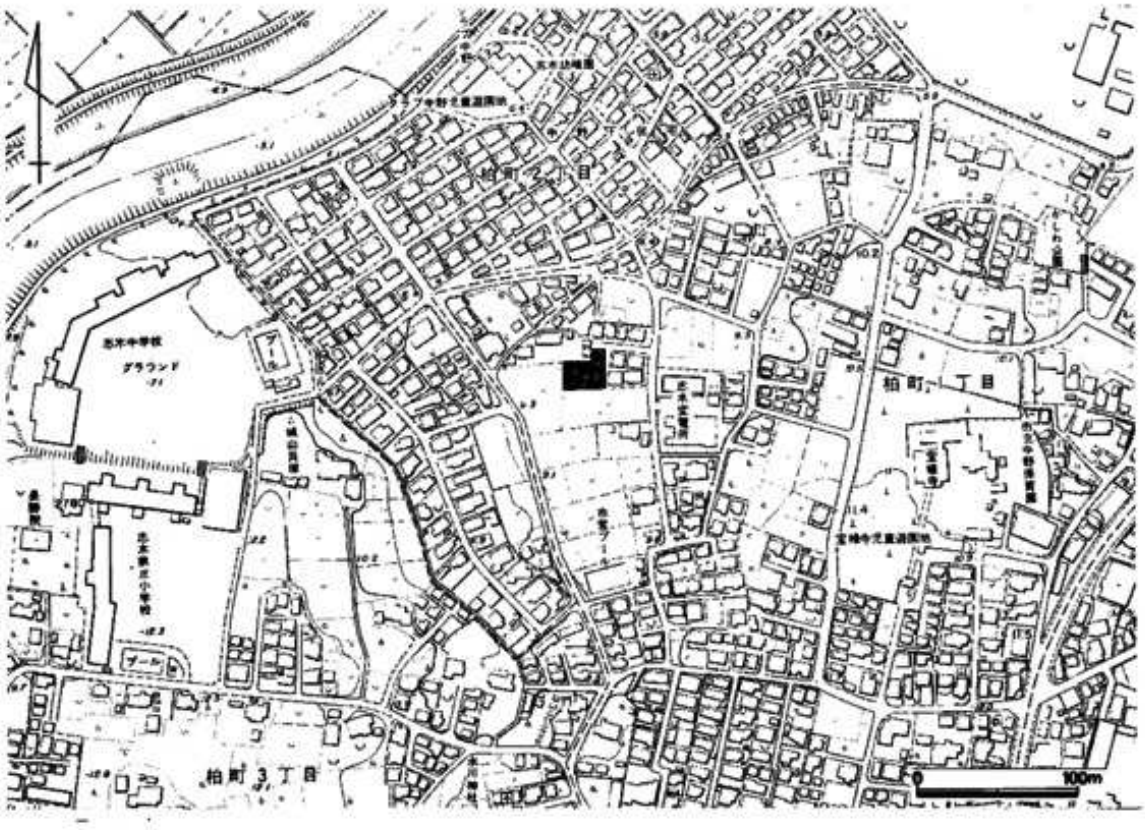
第１節　調査の経緯

(1) 調査に至る経過

昭和59年４月27日、　個　人　　から志木市柏町１丁目1496－15～25に所在する開発予定地内における文化財の有無・取り扱いについて、志木市教育委員会（以下、教育委員会）に照会があった。

当該開発予定地は、志木市No.2遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地の中に含まれており、教育委員会では、現状保存するよう指導・協議したが、開発計画の変更が不可能であるという事態に至り、やむを得ず記録保存のための発掘調査を行うことに決定した。

その後、５月11日に　個　人　　から埋蔵文化財発掘届が提出されたため、教育委員会では、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）に発掘調査を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、委託契約を締結し、５月12日に埋蔵文化財発掘調査届を文化庁に提出し、５月14日から発掘調査を開始した。



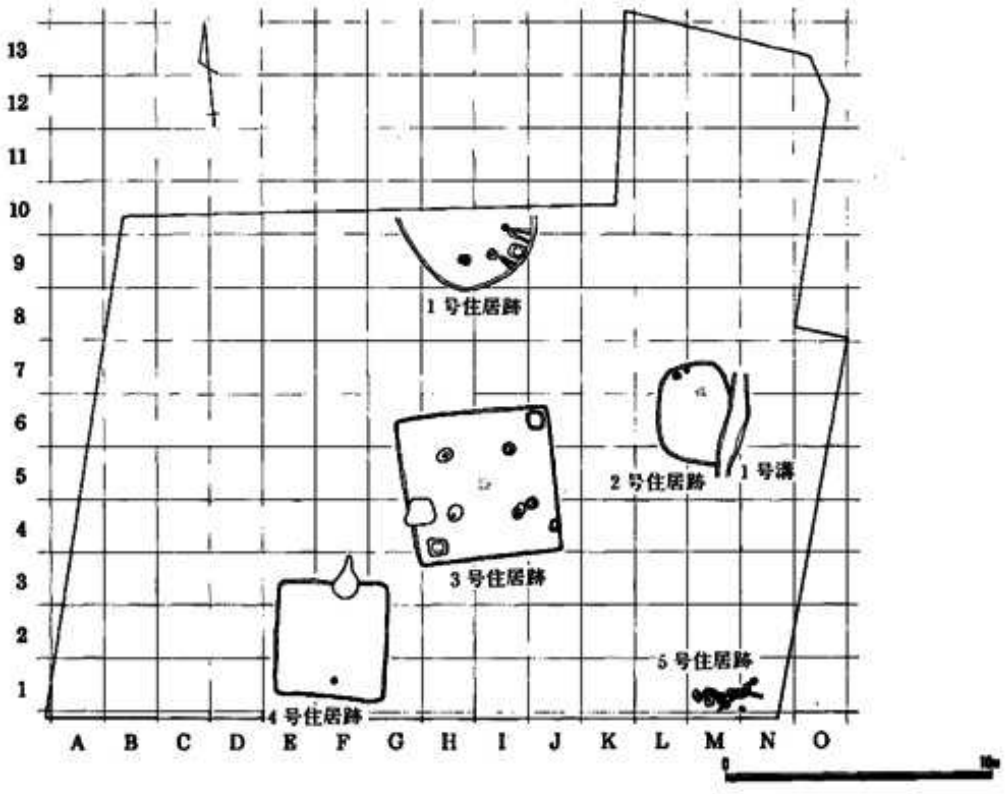
第19図　周辺の地形と発掘区（１／5000）

(2) 立地と環境

中野遺跡は、志木市柏町1丁目に所在する。遺跡は柳瀬川を北方に臨む台地上に位置し、標高約9.5m、沖積地との比高差約3mを測る。遺跡の周辺は宅地化が進んでおり、部分的に田畑を残すのみとなっている。なお、本遺跡は、過去に1度調査されている。[(1)] 遺跡の西方には小支谷が入り込んでいて、その対岸には縄文時代前期後半の所産と思われる城山貝塚がある。この貝塚のある一帯は、中世の城郭址である、「柏の城」があった地といわれ、発掘調査により大規模な堀跡が確認されている（宮野　1981）。また、古墳時代後期鬼高期の住居址も検出されている（市毛　1983）。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は5月14日から開始した。発掘区南西隅に基点を置き、2×2mグリッドを全面に設定し、西側A列から遺構確認作業を開始した。発掘区西半は、表上の深さが40cm程度と比較的浅かったが、この部分が植木畑として使用されていたため、樹木の根が張り、作業は困難をきわめた。しかし、（E－1・3）G、（H－5）G、（M－1）Gに黒褐色土の落ち込みが確認され、発掘区の東側に遺構の存在することが予測された。発掘区東半は荒地となっており、表土には砕石などが入れられ固められていたため、ブルドーザーを導入することとし、遺構が検出されなかった発掘区西側D列までを土置き場とし、表土剥ぎを行った。



第20図　遺構分布図（1／300）

表土剝ぎ完了後、再び遺構確認作業を開始し、前記３ヶ所の落ち込みの他、（M－７）G、（H－９）G、を中心として２ヶ所の落ち込みを新たに発見、いずれも住居址であることが確認された。

５月22日からは、それぞれの遺構の調査を開始し、実測・写真などの記録を行い、６月１日には実質的な調査を修了、６月７日には埋め戻しも完了した。

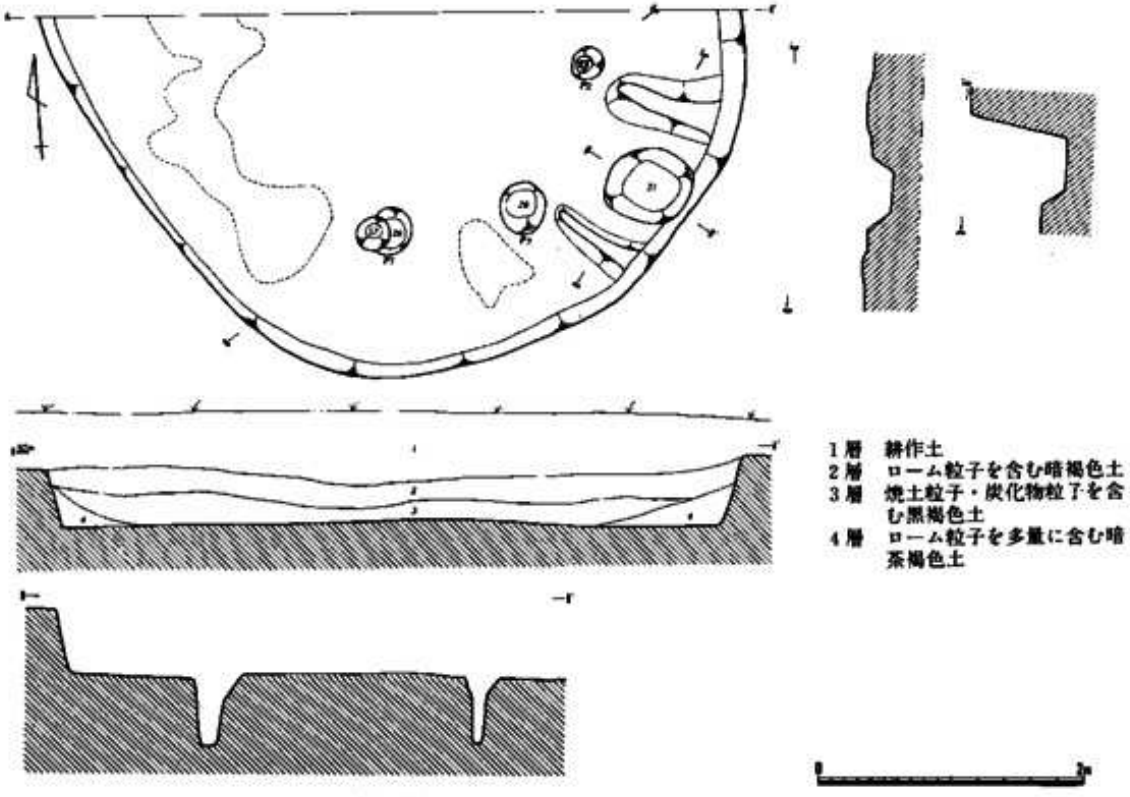
註１　昭和58年10月に遺跡調査会によって発掘調査されたが、遺構の検出はなく、縄文時代中・後期の土器片、土師器・須恵器の小破片が僅かに出土した。

第２節　出土した遺構と遺物

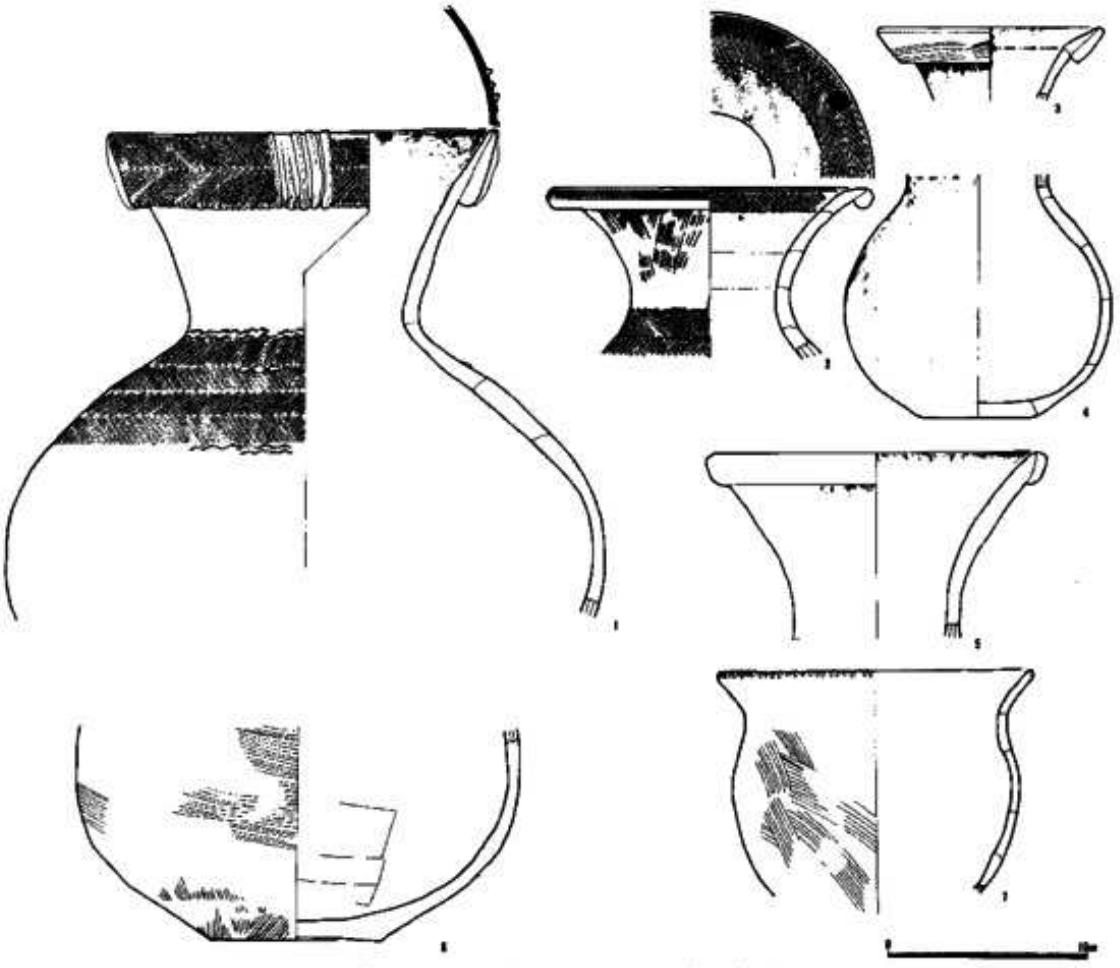
（1）住居址

１号住居址（第21図）

（H－９）Gを中心にして位置する。北半は発掘区外にあるため規模は不明であるが、平面形は長辺が張る隅丸長方形になるものと思われる。壁は高さ50cm前後を測り、急斜に立ち上がる。床面は全体に軟弱であるが、挿図中破線で示した範囲は硬化している。炉は検出できなかったが、発掘区外にあるものと推定される。ピットは３本検出されたが、柱穴はP_1とP_2が該当、主柱穴は４本になる可能性が強い。P_3は入口施設に関連するものと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部にあり、60×



第21図　１号住居址（１／60）



第22図　1号住居址出土土器（1／4）

60cmの大略隅丸方形を呈し、深さ20cm前後を測る。貯蔵穴の周囲には、高さ3cmの前後の凸堤がめぐる。住居址の覆土は3層からなり、炭化物粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。遺物の出土は覆土中・床面上からあったが、さほど多くなかった。本住居址の時期は、出土した土器から弥生時代後期と考えられる。

1号住居址出土土器（第22図）

壺形土器（1～6）

1は胴部下半を欠損する。最大径をほぼ胴部中位にもち、頸部で「く」字状に屈曲し、外反しながら口縁部に至る。口縁部は複合口縁となり、単節の縄文が羽状に施され、5本1組の棒状浮文が4単位付けられる。口縁部下端にはヘラ状施文具による刻みが加えられる。口唇上にも縄文が施される。肩部には単節の縄文を羽状に4段施し、その上下を2条の「S」字状結節文で区画する。また、3個1組の円形浮文が4単位施される。内外面ともよく磨かれ、外面頸部及び胴部、内面口頸部は赤彩される。床面上の出土である。

2は口頸部のみ約1／2の遺存度である。複合口縁の土器で、頸部は大きく外湾し、口縁部は内面に1段稜をもち、水平縁ぎみとなって開く。口縁部内面には単節の縄文が羽状に施され、その下端に

は「S」字状結節文が附加されている。水平縁ぎみとなった口縁部内面には、ほぼ等間隔に円形朱文が配される。口唇上にも縄文が施される。肩部には「S」字状結節文が附加された単節の縄文が羽状に施される。頸部内外面は丁寧に磨かれるが、外面には部分的にハケ目を残す。頸部内外面とも赤彩される。覆土中の出土である。

3は口頸部のみ遺存する。複合口縁の土器で、口縁部は大きく外反する。外面頸部、内面口頸部は丁寧に磨かれているが、外面には部分的にハケ目を残す。口縁部外面は横ナデされるが、横位のハケ目を残す。内外面とも赤彩される。覆土中の出土である。

4は頸部以上を欠損する。最大径を胴部下位にもち玉葱形を呈する。外面は丁寧に磨かれ赤彩される。内面はナデられる。床面上の出土である。

5は口頸部のみ約1／3の遺存度である。複合口縁の土器で口縁部は外反する。外面頸部、内面口頸部は丁寧に磨かれ赤彩される。口縁部外面は横ナデされる。覆土中の出土である。

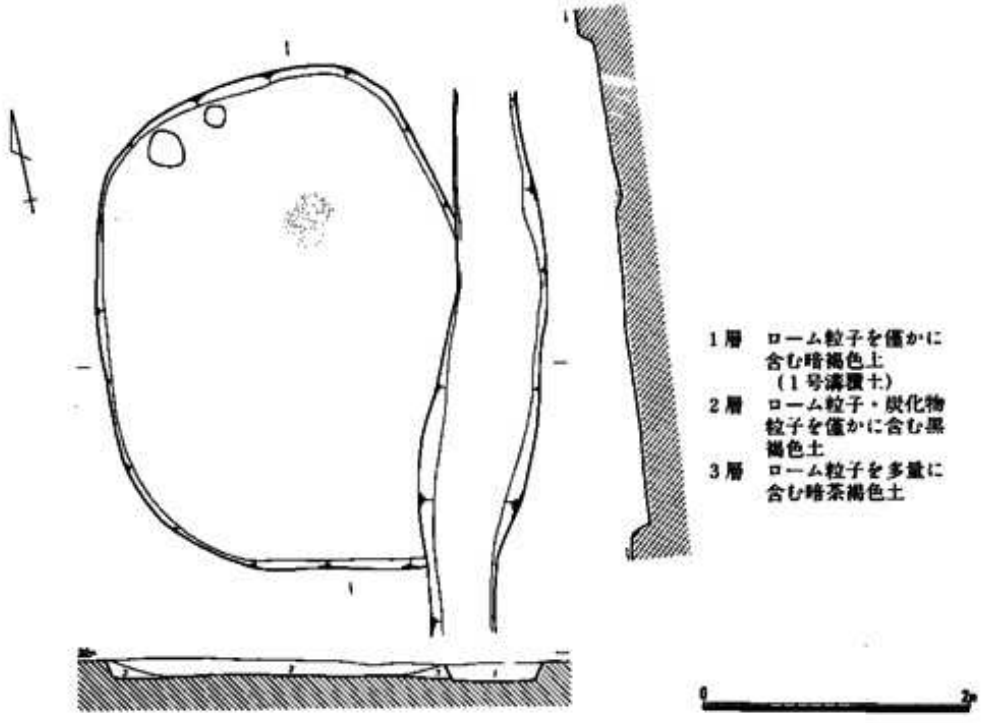
6は胴部下位以下のみの遺存である。最大径を胴部下位にもち下脹れの形状を呈する。外面は磨かれるが部分的にハケ目を残す。内面は横位にヘラナデされる。覆土中の出土である。

甕形土器（7）

胴部下位以下を欠損するが、台付甕形土器となろう。頸部はゆるやかに湾曲し、口縁部は外反する。口唇上にはヘラ状施文具による刻みが加えられる。口頸部外面は横ナデ、胴部外面はナデられるが、ハケ目を残す。内面はナデられる。内外面とも煤が付着する。覆土中の出土である。

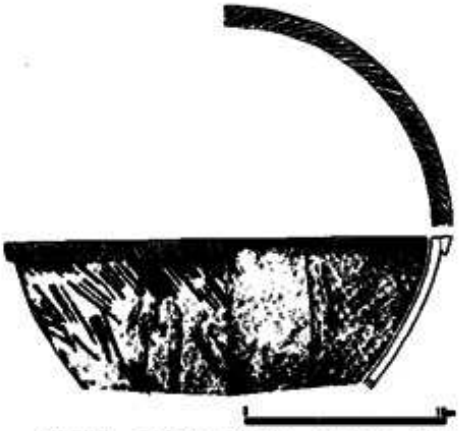
2号住居址（第23図）

（M－6）Gを中心にして位置する。住居東側は歴史時代の溝遺構により破壊されているが、規



第23図　2号住居址・1号溝（1／60）

模は380×285cmを測り、平面形は大略隅丸長方形を呈する。壁は高さ15cm前後を測り、ゆるやかに立ち上がる。床面は全体に軟弱であった。炉は住居中央からやや北に偏ってあり、40×30cmの楕円形を呈する地床炉であるが、炉底が僅かに焼けている程度であった。柱穴は検出することができなかった。住居址の覆土は2層からなり、ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。遺物は覆土中から僅かに出土した。本住居址の時期は、出土した土器から弥生時代後期と考えられる。



第24図　2号住居址出土土器（1／4）

2号住居址出土土器（第24図）

鉢形土器ないしは高坏形土器と思われる。口縁部1/4程度からの推定復元のため、口径には多少の誤差があるかもしれない。体部は椀状を呈し、口縁部は複合口縁となる。口縁部及び口唇上には無節Rの斜縄文が施される。内外面とも丁寧に磨かれるが、外面には部分的にハケ目を残す。内外面とも赤彩される。

3号住居址（第25・26図）

（H－5）Gを中心にして位置する。規模は570×560cmを測り、平面形は正方形を呈する。壁は高さ30cm前後を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体に軟弱であった。住居はほぼ中央に40×30cmの範囲で床面が僅かに焼けていた。炉であった可能性もある。カマドは西壁中央から南に偏って位置する。長さ127cm、幅105cmを測り、袖部及び天井部は灰白色粘土により構築されていた。掛け口には土師器坏形土器とコップ形土器を倒立状態で重ねて置き、支脚としていた。ピットは4本検出されたが、これが主柱穴となろう。貯蔵穴は南西コーナー部と北東コーナー部に2基検出された。南西コーナー部のものは74×64cmの長方形を呈し、深さ93cmを測る。北東コーナー部のものは80×65cmの不整楕円形を呈し、深さ34cmを測る。作りは南西コーナー部のものが整然としている。住居址の覆土は8層からなり、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。遺物は覆土中及び床面上から比較的多く出土した。床面上の遺物は貯蔵穴のある南西・北東のコーナー部付近に多い。また、カマド掛け口に土師器甕形土器が据えた状態で残っていた。本住居址の時期は、出土した土器から鬼高期と考えられる。

3号住居址出土土器（第27図）

坏・椀形土器（1～8）

1は9の土器とともにカマド内で支脚として使用されていた土器である。丸底状の底部から内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。外面は底部から体部中位にかけてヘラ削り、体部上位は磨き、口縁部は横ナデされる。内面は口縁部横ナデされる。内面は口縁部横ナデ、それ以下は磨かれる。内外面とも赤彩される。完形。

2は丸底ぎみの底部から内湾しながら立ち上がる深めの土器である。外面は底部がヘラ削りされ、体部は磨き、口縁部は横ナデされる。内面は口縁部横ナデ、それ以下は磨かれる。内外面とも赤彩

される。胎土は緻密で精選されている。床面上出土の土器であるが、一部2号貯蔵穴覆土中から出土したものと接合した。ほぼ完形である。

3はほぼ平底の底部から内湾しながら立ち上がる。内面体部下端はヘラ削り、体部は磨き、口縁部は横ナデされる。内面は口縁部横ナデ、それ以下は磨かれる。内外面とも赤彩される。床面上・柱穴中・覆土中出土の破片が接合したもので、約1／2の遺存度である。

4は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部で僅かにくびれ、口縁部はやや外反する。口唇部は内削ぎ状を呈する。外面体部下位以下はヘラ削り、体部上位は磨き、口縁部は横ナデされる。内面は口縁部横ナデ、それ以下は磨かれる。内外面とも赤彩される。1号貯蔵穴覆土の出土で、約1／2の遺存度である。

5はほぼ平底の底部から稜をもって体部下位に移行し、体部上位は内湾し、頸部でややくびれ、僅かに外反して口縁部に至る。口唇部は内削ぎ状を呈する。外面底部は放射状にヘラ削り、体部は磨きが施されるが、ヘラ削りの跡を残す、口縁部は横ナデされる。内面は全面磨かれるが、一部ヘラ削りの跡を残す。内外面とも赤彩される。カマド中の出土で、約1／2の遺存度である。

6は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部でややくびれ、口縁部は僅かに外反する。口唇部は内削ぎ状を呈する。器面が荒れて不鮮明であるが、体部下端はヘラ削り、体部は磨き、口縁部は横ナデされる。内面口縁部は横ナデ、それ以下は磨かれる。内外面とも赤彩される。カマド中出土の土器であるが、一部1号貯蔵穴覆土中から出土したものが接合する。ほぼ完形である。

7は平底の分厚い底部から内湾しながら立ち上がる。外面体部下端はヘラ削り、体部は磨き、口縁部は横ナデされるが、非常に雑な器面調整である。内面はナデが施される。なお内面底部中央には、径3cm程のほぼ円形のくぼみがあり、その中には指頭痕が残る。外面底部のくぼみとともに、器面調整時の手持ちの跡であろうか。床面上の出土で、約3／4の遺存度である。

8は体部下位で外湾ぎみに開き、体部上位で内湾し、口縁部は立ちぎみに僅かに外反する。底面には径3cm程のくぼみがある。外面体部下端はヘラ削り、体部は磨き、口縁部は横ナデされる。内面口縁部・体部は横ナデ、底部は磨かれる。カマド中の出土で、約2／3の遺存度である。

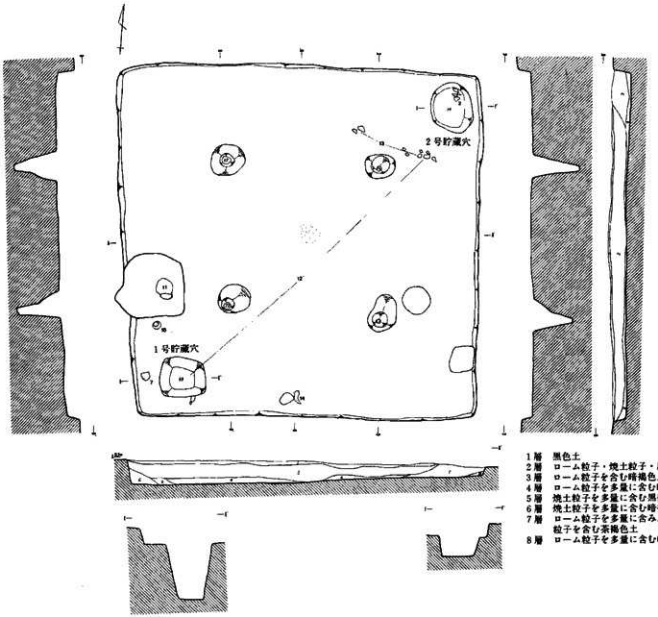
コップ形土器（9）

1の土器とともにカマド内で支脚として使用されていた土器である。平底の底部から僅かに内湾しながら急角度で立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は内削ぎ状となる。外面口縁部は横ナデ、それ以下は磨かれる。内面は横ナデされる。ほぼ完形。

壺（10）・甕（11～14）形土器

10は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁上は直線的に外反する土器である。口頸部内外面は横ナデ、肩部外面は縦方向の磨き、内面は3段の輪積痕があり、土器製作時の指頭痕を明瞭に残す。床面上の出土で、肩部以下を欠損する。

11はカマド掛け口に残されていた土器で、ほぼ完形である。頸部はやや内湾ぎみに立ち、口縁部は僅かに外反する。肩部は頸部で屈曲し、ゆるやかに内湾しながら胴部下位に至り、そこで稜をもち急激にすぼまり底部に移行する。外面口頸部は横ナデ、胴部上半は磨き、下半はヘラ削りされる。内面口頸部は横ナデ、それ以下は磨かれる。

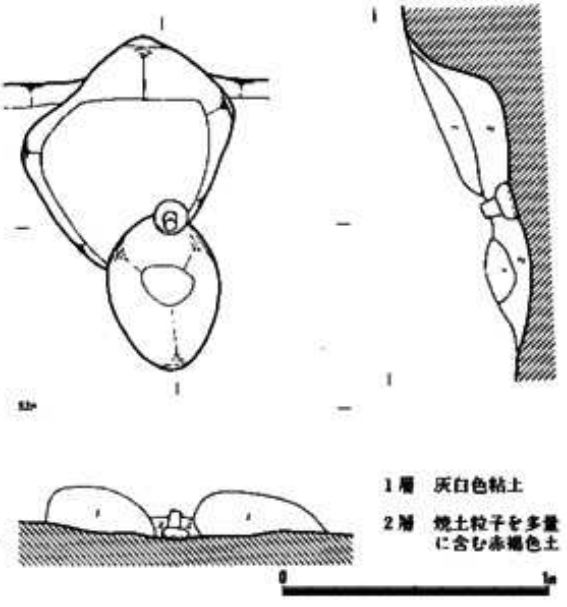


1層　黒色土
2層　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土
3層　ローム粒子を含む暗褐色土
4層　ローム粒子を多量に含む暗茶褐色土
5層　焼土粒子を多量に含む黒褐色土
6層　焼土粒子を多量に含む暗褐色土
7層　ローム粒子を多量に含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む茶褐色土
8層　ローム粒子を多量に含む暗茶褐色土

第25図　3号住居址（1／60）

12・13は頸部が直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。肩部は頸部で屈曲し、ゆるやかに内湾しながら底部に至る。12は外面口頸部横ナデ、胴部上半は磨かれるが、ハケ目を残す。胴部下半はヘラ削りされる。内面口頸部は横ナデ、それ以下は磨かれる。1号貯蔵穴覆土中出土の土器であるが、住居址覆土中・柱穴中出土のものと接合する。ほぼ完形。13は口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面は磨かれるが、一部ヘラ削り痕を残す。床面上の出土で、胴部下位以下を欠損する。

14は頸部が直線的に立ち、口縁部は外反する。肩部は頸部で屈曲し、内湾しながら胴部に移行する。口頸部内外面は横ナデ、それ以下は磨かれる。床面上の出土で、胴部上位以下を欠損する。



第26図　3号住居址カマド（1／30）

4号住居址（第28図）

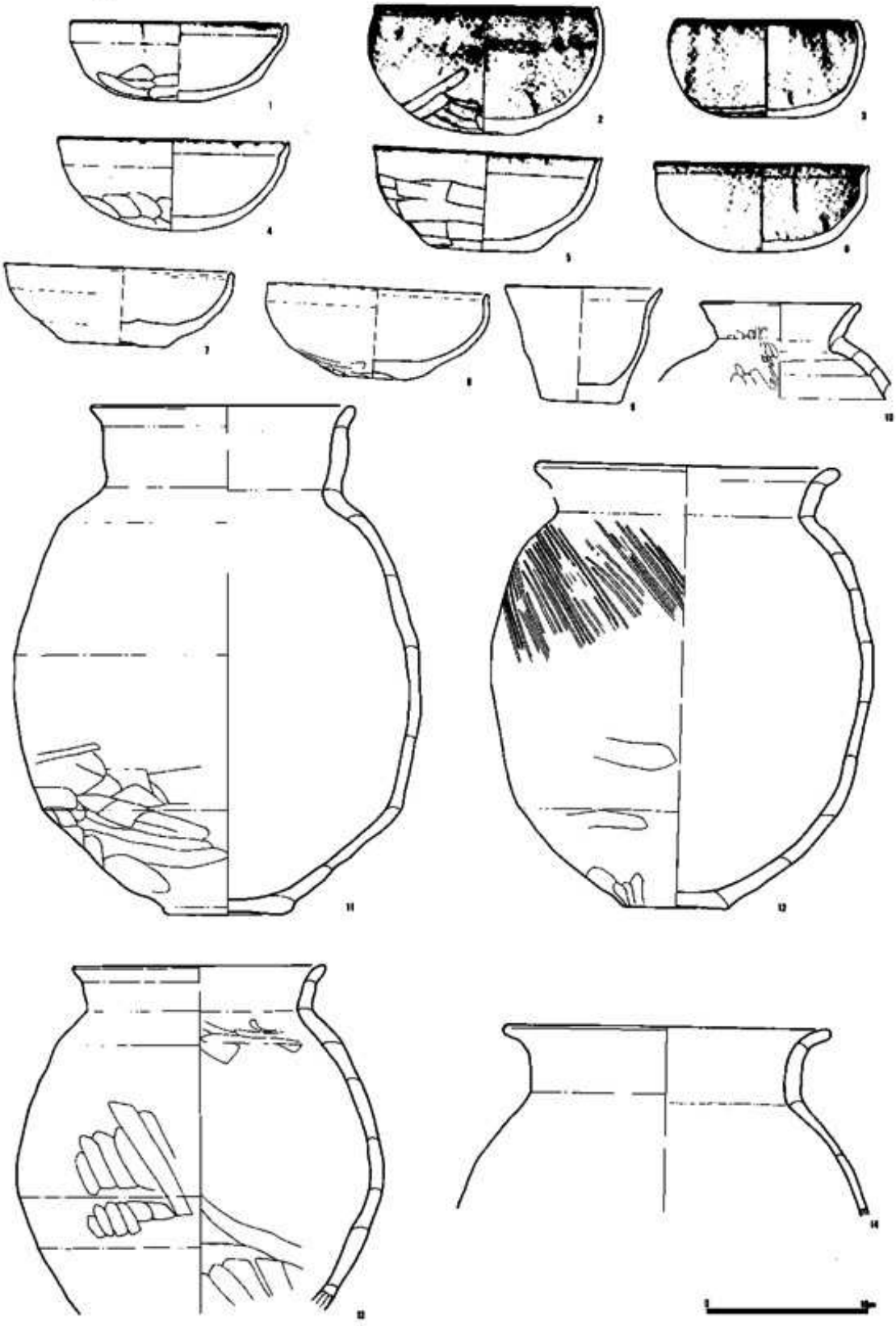
（F－2）Gを中心にして位置する。規模は435×420cmを測り、平面形は正方形を呈する。壁は高さ20cm前後を測り、急斜に立ち上がる。床面は壁際を除きよく踏み固められ、叩き床状を呈する。また、壁付近に比較して中央部分がやや高い。カマドは北壁中央から東に偏って位置し、長さ162cm、幅140cmを測る。壁から長さ110cmにわたって傾斜をもつ掘り込みを作り煙道部とし、煙出し口に至る。壁下床面を楕円形に掘りくぼめ燃焼部とする。袖部及び天井部は灰白色粘土で構築されている。ピットは1本検出されたが、これは入口施設に関連するものと考えられる。住居址の覆土は、ローム粒子を多量に含む黒褐色土の単一土層である。遺物の出土は僅かであったが、床面上から2個体の須恵器坏形土器が出土した。本住居址の時期は、出土した土器から国分期と考えられる。

4号住居址出土土器（第29図）

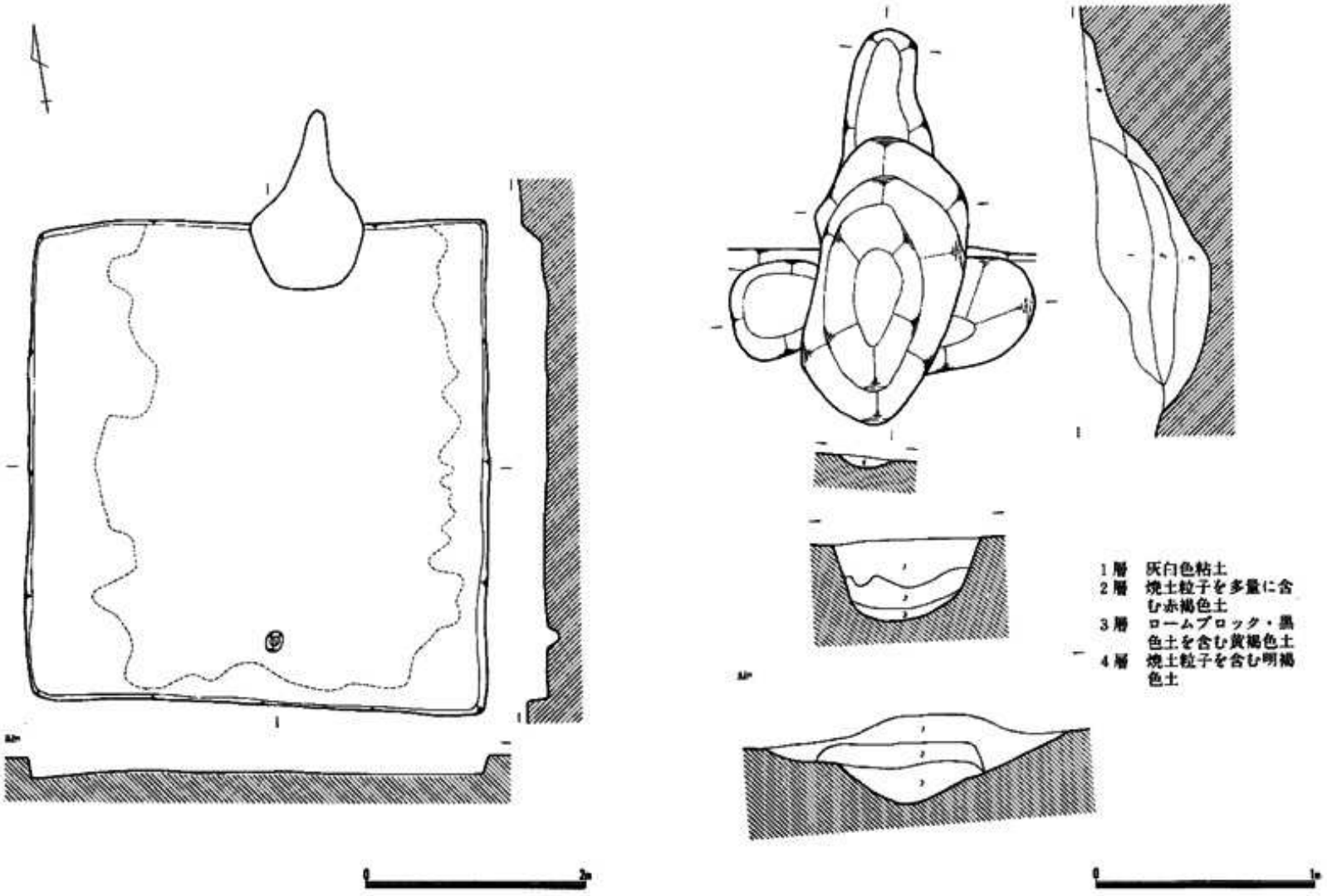
いずれも床面上から出土した須恵器坏形土器である。

1は平底の底部から僅かに内湾ぎみに立ち上がる。口径13.7cm、底径7.5cm、器高3.7cmを測り、大略完形である。色調は暗灰色を呈し、胎土には小石及び白色針状物質を含む。底面は全面回転ヘラ調整される。

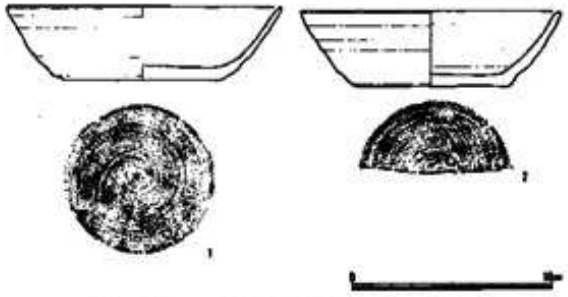
2は平底の底部から内湾しながら立ち上がる。口径13cm、底径7.6cm、器高3.8cmを測り、1／2程度遺存する。色調は暗灰色を呈し、胎土には小石及び白色針状物質を含む。底面は全面回転ヘラ調整される。



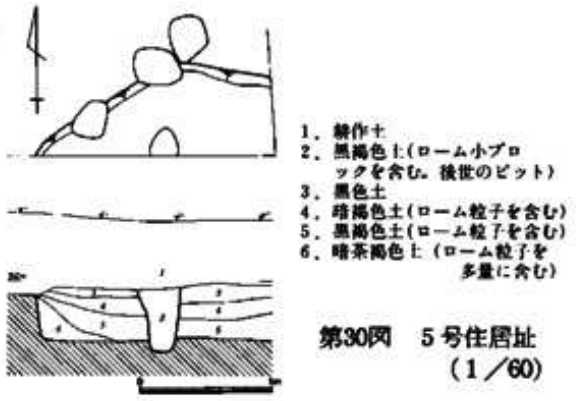
第27図　3号住居址出土土器（1／4）



第28図　4号住居址(1／60)及びカマド(1／30)



第29図　4号住居址出土土器（1／4）



第30図　5号住居址（1／60）

5号住居址（第30図）

（N－1）Gに位置する。大部分が発掘区外にあたるため、規模・平面形など詳細は不明である。また、歴史時代のピットに切られる。壁の高さは30cm前後を測り、急斜に立ち上がる。覆土は4層からなり自然堆積状態を呈する。遺物は覆土中から3片の土器片の出土があったのみであり、本住居址の時期を知ることはできなかった。

(2) 溝遺構

1号溝（第23図）

M・N列に位置し、2号住居址を切る。上幅50～85cm、下幅35～65cm、深さ15cm前後を測る。断面形は皿状を呈する。走行方向はほぼ北一南であるが僅かに東に振れる。覆土はローム粒子を僅かに含む暗褐色土の単一土層でしまりがない。遺物は覆上中から土器細片が僅かに出土したのみである。時期は不明であるが、覆土の状態から判断して中世以降のものと思われる。

(3) 包含層出土の遺物

包含層出土の土器（第31図）

第1類　縄文時代早期末葉の土器（1～6）

1は波状口縁の土器である。口縁に沿って平行沈線を波状に施し、波頂部下ではそれぞれが渦巻状ないしは蕨手状になる。内面は条痕が磨り消されたらしく、僅かにその痕跡を残す。

2は口縁に沿って平行沈線が引かれた土器である。内面には擦痕を残す。

3は無文の土器であるが、口唇上に刻みが付けられる。内面は条痕が磨り消される。

4・5は無文の土器で、5の内面には条痕を残す。

6は内外面に条痕が施される。

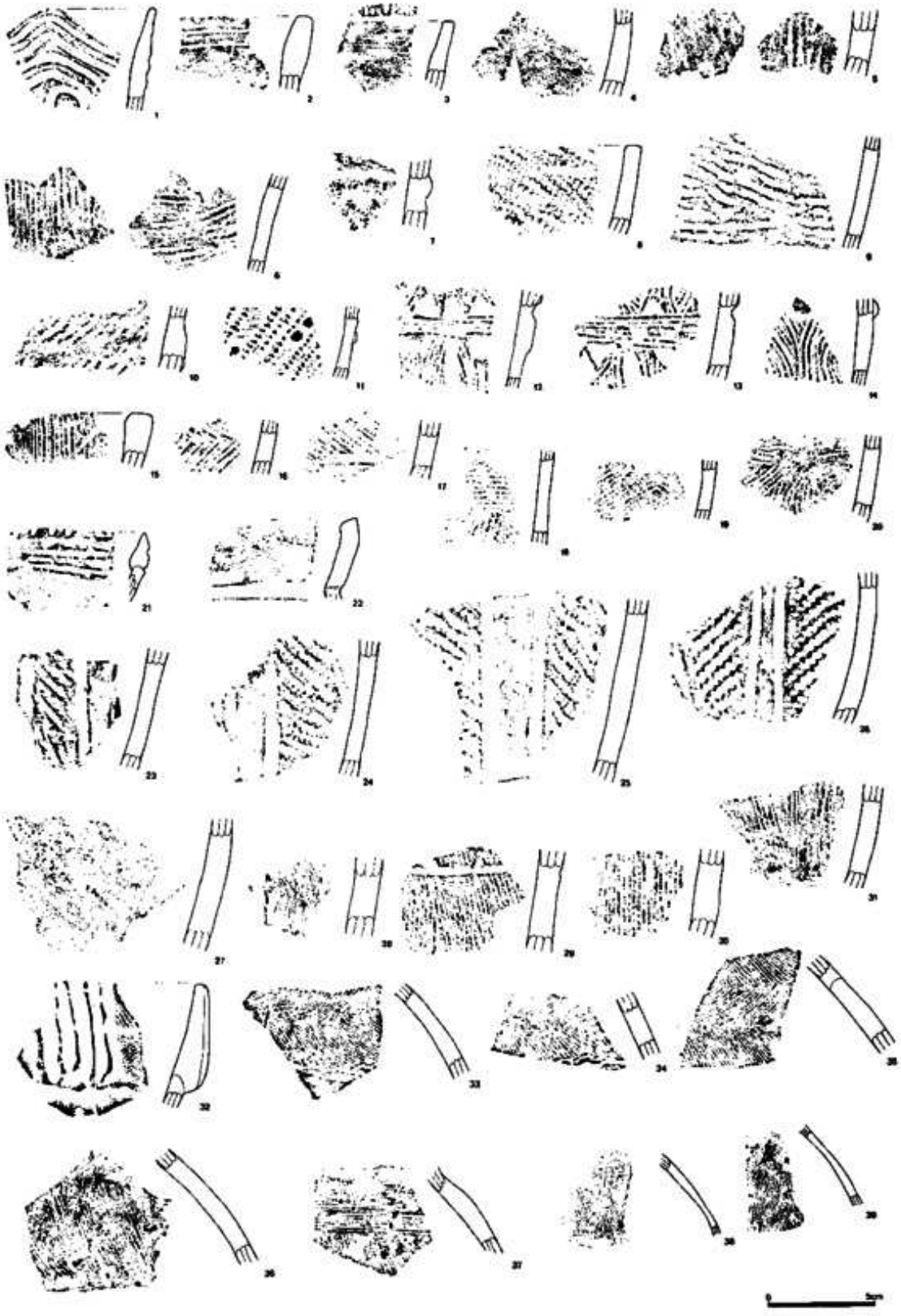
以上は、いずれも胎土中に繊維を含み、2～4には動物珪酸体といわれる白色の針状物質を含む。

第2類　縄文時代前期前半の土器（7～10）

7は横位に隆帯が貼り付けされた土器で、隆帯下には単節RLの斜縄文が施される。

8は単節RLの斜縄文が施される。

9・10は無節の斜縄文が施される土器で、9はR、10はLとなる。



第31図　包含層土土器(1／3)

以上は、いずれも胎土中に多量の繊維を含む。

第3類　縄文時代前期後葉～中期初頭の土器（11～20）

11は集合する横位の平行沈線を地文とし、半截竹管の内側を押し引きした結節浮線文が斜位に施される。また、ボタン状の貼付文が付けられる。

12・13は同一個体と思われる土器で、横位の集合沈線によって区画され、その上下に三角形・凸レンズ状の沈刻文が刻まれ、それに沿って集合沈線が施される。

14は半截竹管による平行沈線で同心円状の文様が施された土器で、円形の貼付文が付けられる。胎土中には金雲母を含む。

15～20は集合沈線が施された土器で、15は縦位に、17～19は斜位・横位に、20は同心円状に施される。20には三角形の沈刻文がみられる。

第4類　縄文時代中期中葉の土器（21・22）

21は口縁に沿って平行沈線が施された土器で、口唇上には刻みが加えられる。口縁部は折り返し状になっていて、内面にその痕跡を残す。

22は口縁部が内湾する土器で、頸部に1条の沈線が巡る。

第5類　縄文時代中期後半の土器（23～31）

23～26は平行沈線間を磨り消した懸垂文が施された土器で、地文は23が無節R、24・25は単節RL、26は単節LRの斜縄文である。

27・28は箆状の施文具で蛇行する条線が施された土器で、28は沈線が垂下する。

29～31は条線を地文とする土器で、29は横位に沈線が巡る。

第6類　弥生時代後期の土器（32～39）

32～37は壺形土器である。

32は口縁部破片で複合口縁となる。口縁部には単節の縄文が羽状に施され、5本1組の棒状浮文が付けられる。頸部外面、口縁部内面はよく磨かれ赤彩される。

33・34は羽状に縄文が施された土器で、縄文帯の下端には2条の「S」字状結節文が附加される。胴部外面は赤彩される。

35は羽状に縄文が施される。

36・37は外面がよく磨かれているが、ハケ目を残す。

38・39は甕形土器で、外面にはハケ目を残す。

第3節　ま　と　め

中野遺跡の発掘調査は今回が2度目になるが、これにより、本遺跡の内容がある程度判明してきたといえる。

1・2号住居址は弥生時代後期の所産であった。1号住居址から出土した土器は、弥生町段階のものと考えて大過ないものと思える。2号住居址は出土土器が僅かで疑問も残るが、一応同時期の

ものとして捕えておきたい。該期の住居址の規模としては、1号住居址が中形、2号住居址が小形とみてよいと思われるが、両者の住居構造は、この地域で調査された他の遺跡の例とほぼ合致する。

柳瀬川流域ではこの時期の集落址が多く発掘されているが、住居軒数の多寡、方形周溝墓・環濠の有無などの集落構成の差異によって、幾つかの形態に分類が可能なようである。本遺跡がどのような集落構成をとるのかは、今後の調査に期待したい。

3号住居址は鬼高期のものである。出土土器はすべて土師器で、坏・椀形土器、コップ形土器、壺形土器、甕形土器などがあった。坏・椀形土器には、丸底の底部から内湾して立ち上がる椀状のものと、体部上位に稜をもち口縁部が直立ぎみに立ち上がり口唇部が内削ぎ状になるものとがある。甕形土器には、口頸部が直立ぎみに立ち上がるものと、「く」字状で外反するものがあった。両者とも長胴化の傾向がうかがえるが、胴部中位に最大径をもち、胴部はいまだ比較的丸みをおびている。また、ヘラ削りによる整形は、主に胴部下位に限られるようである。これらのことから本住居址出土の土器は、概ね6世紀前半の年代を与えることが可能と考えられる。

4号住居址は国分期のものであった。出土した土器は僅かで、図示した2点の須恵器坏形土器以外はすべて小破片であった。須恵器坏形土器は、口径・底径・器高といった法量の差と、底面の調整の違いなどから時期差を追うことができるといわれ、実年代が与えられている。先学諸氏の研究成果を踏まえて、本住居址出土の坏形土器を大まかではあるが8世紀後半から9世紀初頭に位置づけておきたい。

今回の調査では縄文時代の遺構の検出はなかった。しかし、表土及び包含層中からは早期末葉から中期後半にかけての土器が、ほぼ断絶することなく出土している。遺構の検出は、今後の調査に期待したい。

〔引用・参考文献〕

市毛　勲他　1983「志木第三小学校校内遺跡（柏の城遺跡）発掘調査概報」『志木風土記』第4集　志木市市史編さん室

小出　輝雄　1983『針ヶ谷遺跡群－南通遺跡第3地点の調査－』富士見市遺跡会調査報告第21集

小久保　徹　1981「西原大塚遺跡B地点」『志木風土記』第2集　志木市市史編さん室

佐々木保俊他　1984『針ヶ谷遺跡群－針ヶ谷地区土地区画整理事業に伴う発掘調査－』富士見市遺跡調査会調査報告第23集

高橋一夫・宮　昌之　1983「北武蔵の窯跡」『神奈川考古』14号　神奈川考古同人会

立石　盛詞他　1983『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

谷井　彪・宮野和明他　1975『西原大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集

宮野　和明　1981「柏の城大堀遺跡」『志木風土記』第2集　志木市市史編さん室

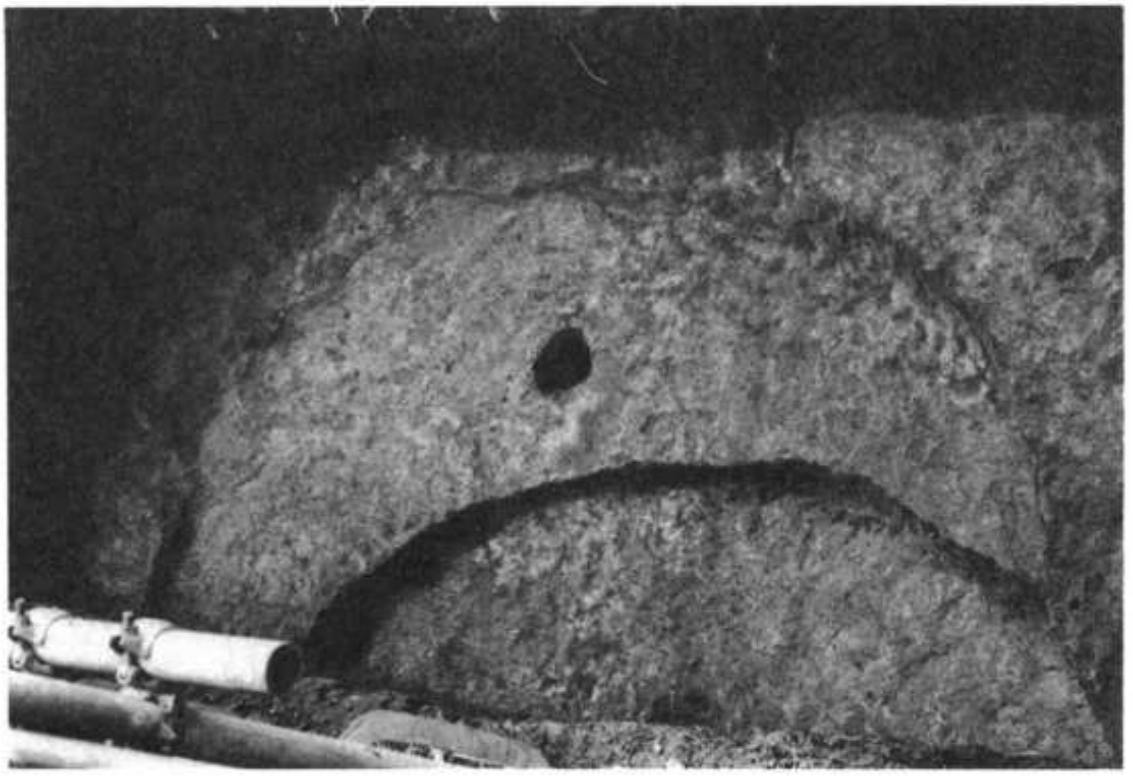
志木市市史編さん室　1984『志木市史　原始・古代資料編』

図　　版

図版一　西原大塚遺跡第三地点

破壊状況

発掘風景



1・6号住居址

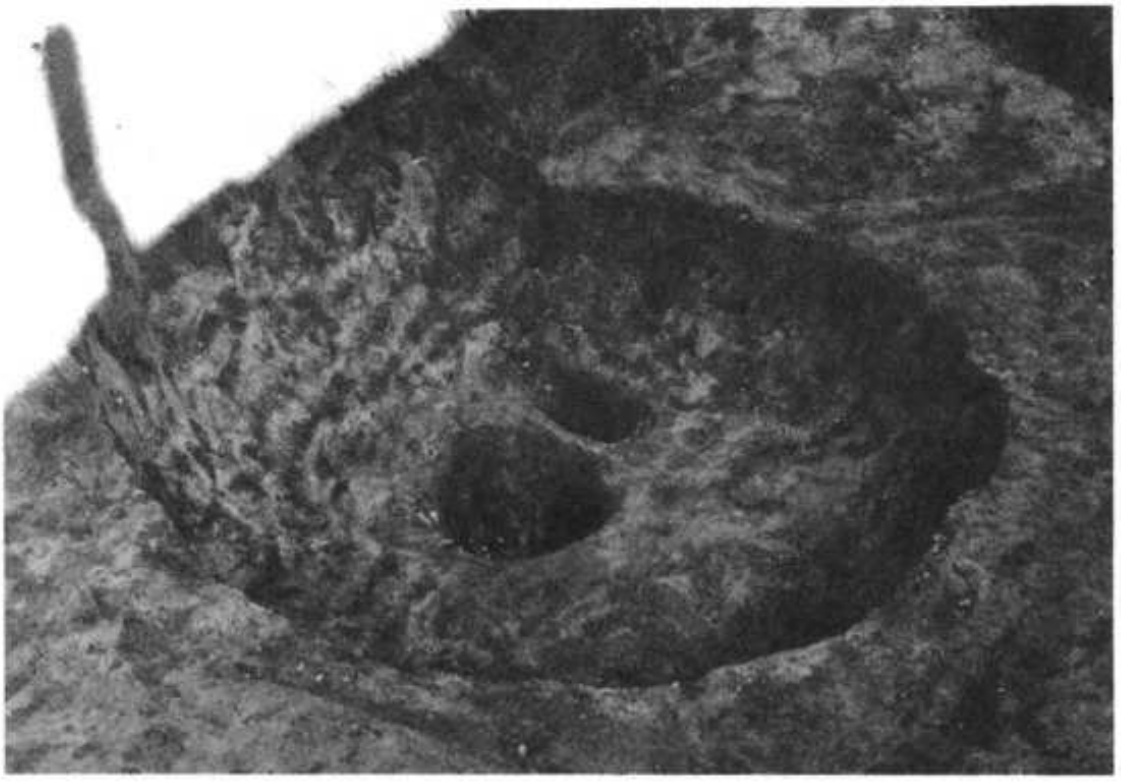
2号住居址

3号住居址

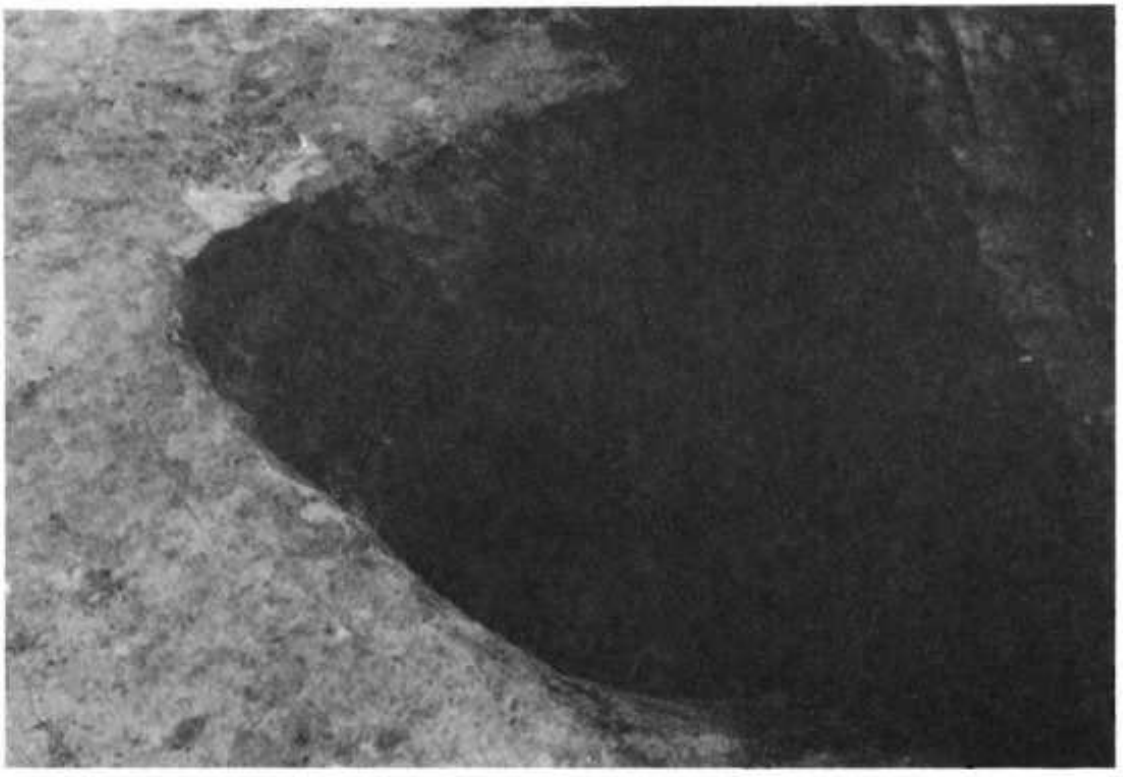
4号住居址

5号住居址

7号住居址



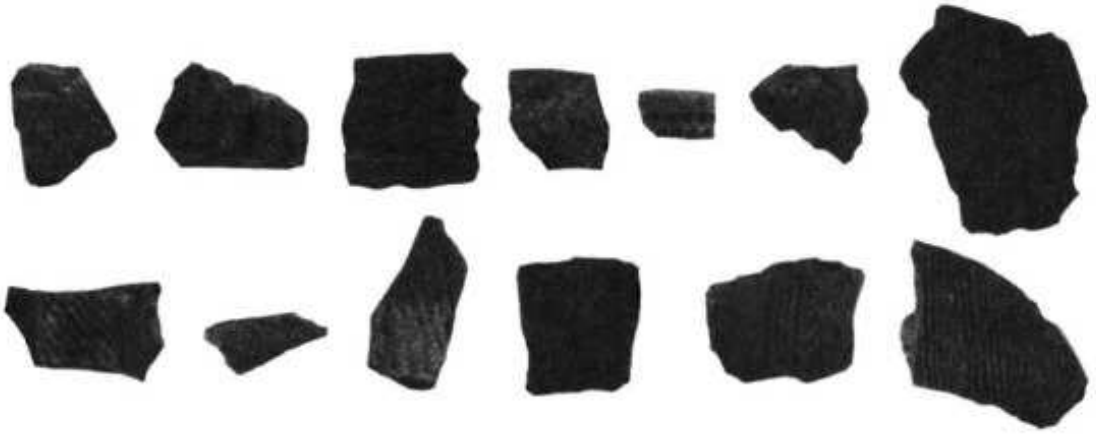
1号土坑



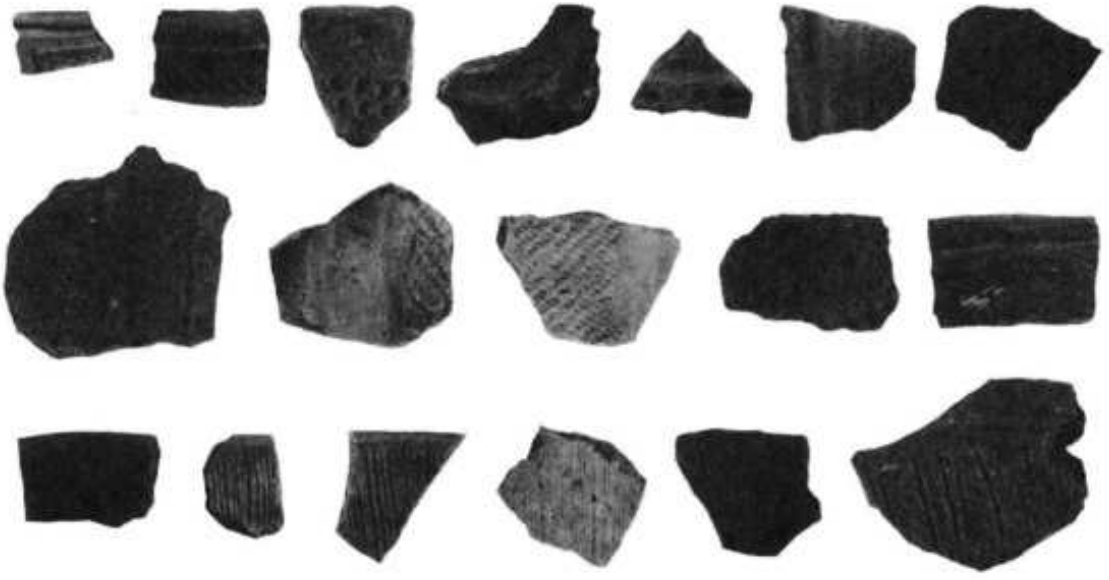
2号土坑

1号住居址出土土器

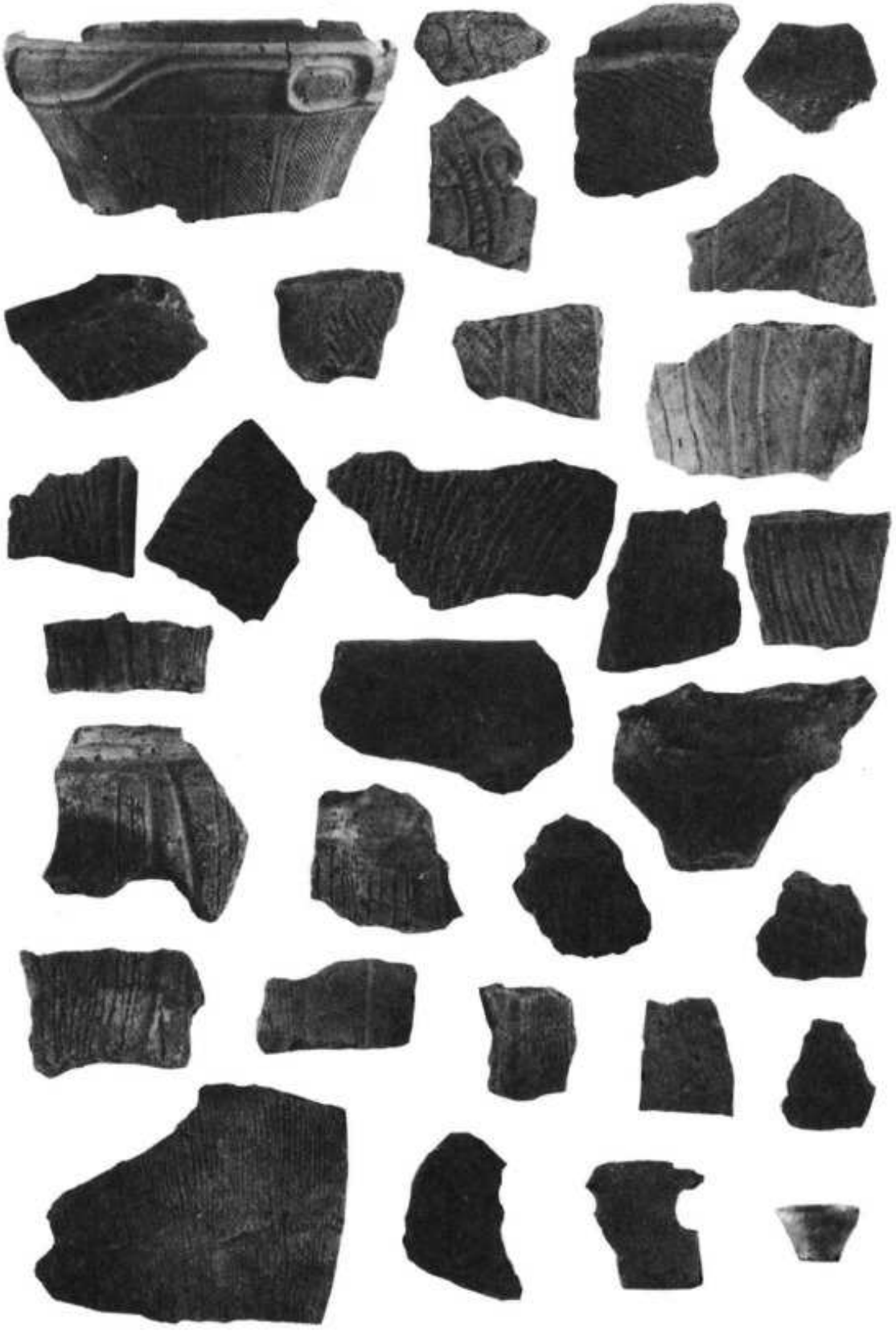
2号住居址出土土器



3号住居址出土土器



4号住居址出土土器



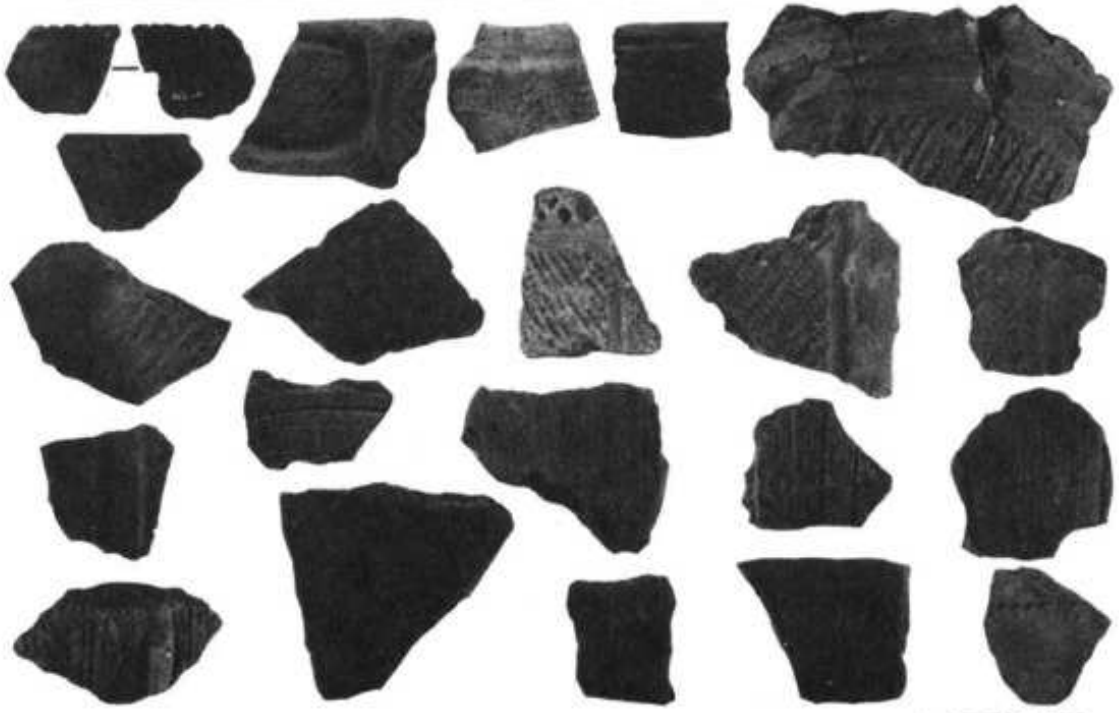
5号住居址出土土器

6号住居址出土土器

7号住居址出土土器

1号土壙出土土器

2号土壙出土土器



包含層出土土器

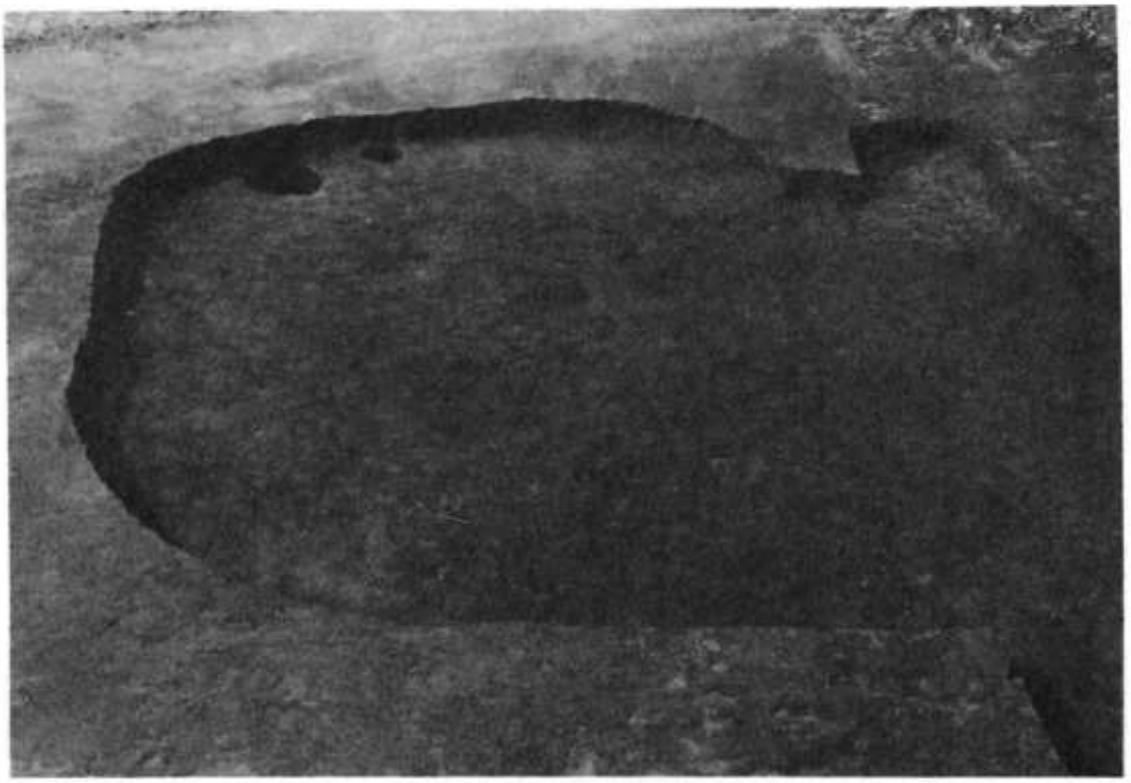
図版九　中野遺跡第二地点

遺跡近景

発掘風景

1号住居址

1号住居址出土土器



2号住居址・1号溝

2号住居址出土土器

3号住居址

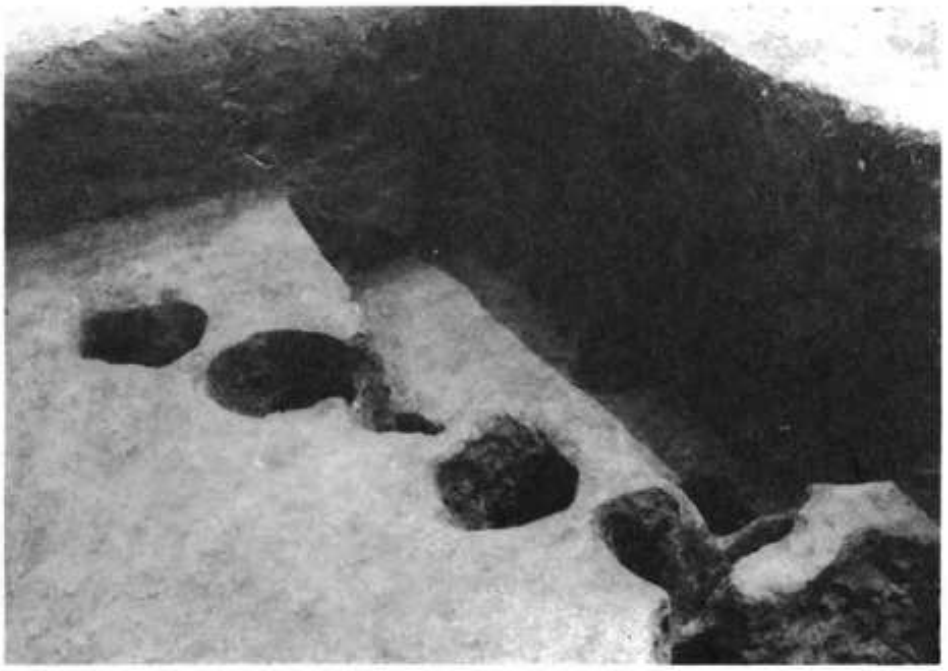
3号住居址カマド

3号住居址出土土器

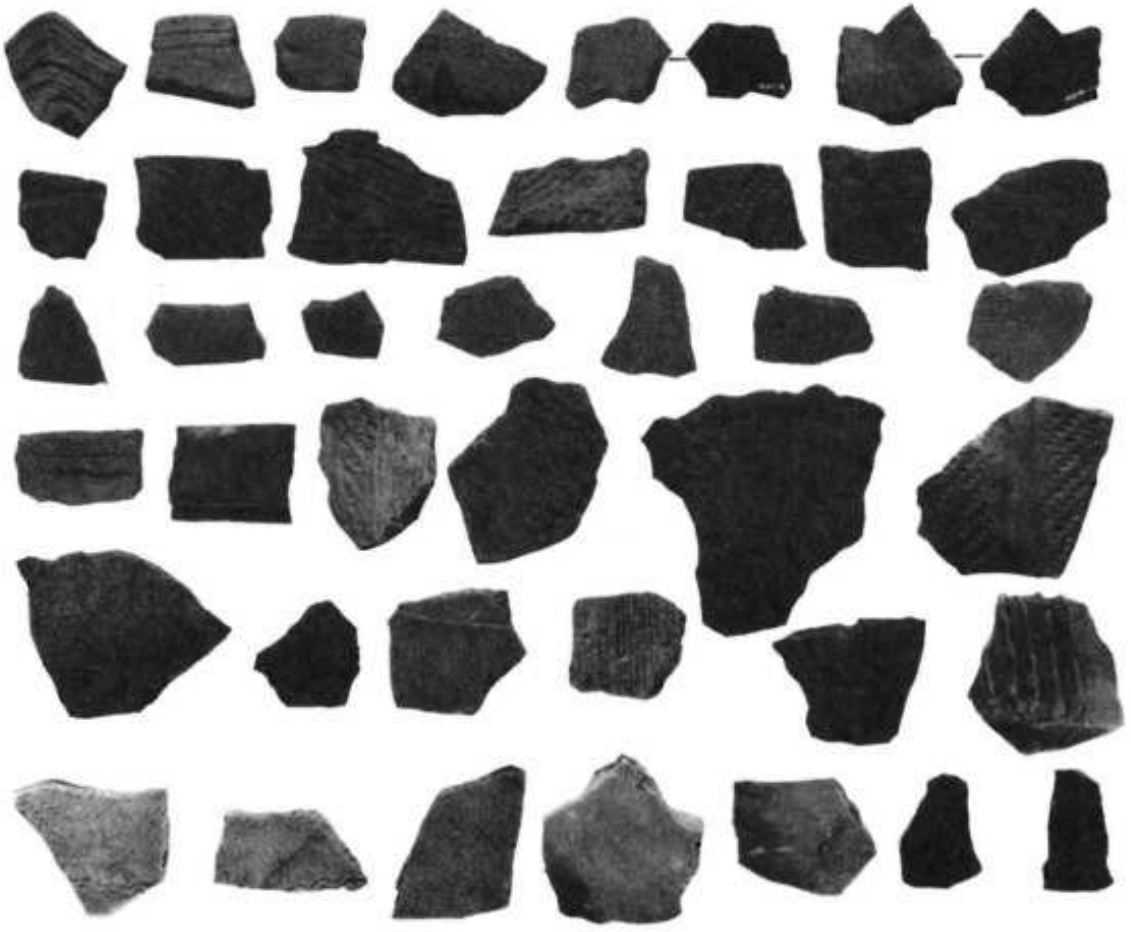
4号住居址

4号住居址出土土器

図版十五　中野遺跡第二地点



5号住居址



包含層出土土器

志木市遺跡調査会調査報告第1集

西原大塚遺跡第3地点
中野遺跡第2地点
発掘調査報告書

昭和60年12月24日発行

発行　志木市遺跡調査会
印刷　松村印刷株式会社